
プロット！

鳴瀬るな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プロット！

【Nコード】

N6478H

【作者名】

鳴瀬るな

【あらすじ】

田舎の中学校を舞台にした休み時間のような短いお話。それでいてお笑い満腹系コメディ。主人公の周りには美少女がいたり不思議ちゃんがいたりと無茶苦茶設定。最後に笑うのは二年一組全員だ。休載中だったりしなかったりのんびりやっています。

退屈な毎日

今の俺にはこの日々を、退屈より適切な言葉で言い表すことができない。

このご時世にこんな話をしたら君には笑われてしまうかもしれないけど、昔父さんが酔っ払って買ってきたファミコンソフトを遊んでいる方がよっぽどマシだ。ディスクを使ってデータを読み込んで遊ぶのが主流の時代に、ヒロインの顔もはっきり認識できない8ビットで映し出される映像は俺にとって新鮮そのものだった。もしかしてこのヒロインは不細工かもしれないなんて思うと、巨大な魔物に立ち向かう主人公には到底頭が上がらない。

幼なじみとの境界線

五十分ぶりになるチャイムの音。短い休み時間の始まりと同時に、この夏に少しロックな女子へと路線変更したクラスメイトが椅子を半回転させると俺に振り返った。そのまま椅子をまたぐように座ると俺の机に両肘を乗せた。

「新作持ってきたんだけど……ちよつとこれ試してみてくれない？」

机に乗せていた腕を下ろすと、自分の鞆から発明品とやらを取り出すエセ博士。何が楽しくて精製を繰り返しているのかは定かではないが、こいつは顔だけが取り柄の人間だ。まともなものを持ってきたことはない。

「断る」

「なんでよ」

「いや、だってさ、そのヘルメットだかヘッドギアだかよくわからない装備を、今俺がすることによって得られる利益が見出せない。というかそんなものを持つてくるために教科書の量を減らすなんて愚の骨頂だなおまえは。学業をとことん舐めてる」

俺は、自分の机の八割の陣地を独占した得体の知れないヘルメットをゴミを払うように手でどけると、顔を突っ伏して睡眠体制に入った。

「私が学業を舐めてるですって？ 理数系ならあんたには負けない

わ」

「国語はどうなんだ？ 俺に勝つどころか、おまえは留学生のマシユーにさえ負けてるじゃないか。本を読め。そしておやすみ」

先週の漢字テストで見事留学生に敗北を帰した幼なじみの美沙。少しきついことを言ってしまったかもしれないけれど、これはこれで俺なりの優しさってやつでいつかは理解してくれるんじゃないか、なんてことを思ってたりする。子供の頃からの出来事を思い出してみると、悪い思いばかりじゃないし、こうやって黙ってればそこそこかわいいやつだから……。

「つててめえ！ 人が頭突っ伏して物思いにふけってる間に何を頭にセッティングしてんだよ！」

「スイッチ怨」

——字がちげえええ！

正直な気持ち

今日の授業を全てこなし、些細な幸せを感じながら友達とそれぞれの自宅へと向かう帰り道。これがもし憧れの女子との下校デートならちょっと色気づいた中学生日記を味わえるのだけど、隣にいるのは体脂肪率およそ四十パーセントと思われる男子生徒。けれど驚くことはない。これがいつもどおりの下校風景なんだ。

「なあ健。おまえまた太ったんじゃないか？」

田舎町であるこの地域で健の体型はかなり目立つ。ワイシャツの上からでもはつきりわかる膨らんだお腹に、はじけそうなベルト。他のやつらとはデザインが違うんじゃないかと思うほどの変形っぷりだ。

「そうかなあ。僕はもう自分自身を把握しきれてないよ」

今や体重計のメーターが暴走列車のように振り切ってしまった健。その速度は日に日に増すばかりだ。食っては寝るという欲望に忠実な結果が生み出した産物。それが健だと俺は思ってる。

「ねえねえ、憲司君。僕をハンバーガーの種類で例えたらなんだと思う？」

健はワイシャツ越しに自分のお腹を掴むと、もう何年も見続けている優しい笑顔で尋ねた。

——何故にハンバーガーなんだろう？

「言ってもいいけど、怒らないって約束できるか？」

「うん。僕から聞いたんだから」

確かに優しい健が怒るはずはない。

だから俺は正直に言った。

「てりやきバーガーを無理やり四つ合体させた感じかな」

俺は、空と健の雲行きが怪しくなる前に早く家に帰ることにした。

自己流の公式

ただ今数学の時間。みんなは先生に出されたちよつと高度な問題を二人一組になって思考中。生徒たちの悩む様子を見て満足げな先生。どこか腹が立つ。

俺もみんなと同じように問題に取り組みたいのだけど、机を合わせている隣の女子がそうはさせてくれない。そんな女子の名前は間宮ちゃん。俺のもっとも苦手とするクラスメイトだ。

「憲司さん、聞いてますか？」

「あー、はいはい」

「つまりですね、神秘のエネルギーがこのX軸に流れ込むとY軸が激しく動揺し」

——数学に動揺って、そんな要素入る余地もねーだろ。

俺はとんでもない電波女子と二人一組になっていた。苦手ながら恐らく正しいであろう解答を俺が導き出そうとすると、『神秘のエネルギーのルールに反する』だとか『地球が目覚めてしまいます』なんていう頭の痛くなる要素で間宮ちゃんに修正されてしまう。

「Y軸がどれほどエネルギーによって動揺するかが問題を解く鍵ですね」

「でっ、でもそれは間宮ちゃんのさじ加減なんじゃないかなあーって俺は思うんだけど……」

——この女、俺は苦手だ。

「いいえ、第六百二十四惑星からあふれ出すエネルギーの質量は変化する余地がありません」

間宮ちゃんが年末特番の『宇宙人VS地球人』さながらの自説を述べていると、先生の手の叩く音が聞こえた。みんな一斉に教壇の方を注目する。

「時間切れです。じゃあ代表として間宮葉子、古橋憲司ペアに答えを言ってもらいましょう。立ってください」

——最悪の展開だ。

たじろぐ俺を尻目に間宮ちゃんはスッと椅子から立ち上がると、

「X軸はY軸の激情により消失します」

と言った。

「正解です」

——え？

給食を食べよう

教室にはカレーの香りが充満していて、カレー大好き二年一組の心は踊る。

しかし『カレー味のうんこと、うんこ味のカレーどっちかを食べなきゃいけないなら、どっちを食べる？』なんていうありがちな中学生日記が行われているのはご愛嬌。だが両方食べると声を張り上げてい、食いしん坊を超えた体脂肪率四十パーセントのナニカ（健）は、今日も俺の想像という名の大気圏をあっという間にロケットで突き抜けてゆく。

机を四人一組になって向かい合わせて食べる給食。案の定俺の班にまともな人間なんているはずがなく、内訳は、いつも前の席に座っている幼なじみの美沙に、隣の席である電波少女な間宮ちゃん。それと普段は美沙の隣に座っているミスター平均値、立花だ。

「憲司に質問があるわ」

美沙はわざわざ俺の肩を叩くと、カレー専用のスプーンをマイクのようにして俺の口元へ差し出した。

「抹茶味のマッチョと、マッチョ味の抹茶だったらどっちを食べるのか答えなさい」

——くだらねえ。くだらなすぎる。

「普段は語彙も少なくて国語も出来ないくせにくだらない言葉遊びをしてる暇があるなら、おまえは黙って、ご飯を口に含んだらすか

さずカレーを口に挿入するというアメーバさながらの単純行為を続ける」

俺が長文を言い切るや否や、恐らくアメーバという単語に反応したのであろう美沙の瞳孔は伸縮し、一時停止。

その後、動き出したと思いきや理科の教科書を鞆の中から取り出し、一ページ目を両手で捲って俺の顔に押し付けた。

「あんたアメーバってこれのことよ？ 見える？ ん？ わ・た・し・の・ど・こ・がこれに似てるって言うのよ！！」

「ボクが思うに……」

ミスター平均値である立花が首を軽く傾げながら発言した。

「マッチョのモデルが誰かによって、相当回答が割れると思う」

——真面目に考えなくていいから。

俺は顔に覆いかぶさっていたクシャクシャになった美沙の教科書を払うと、カレーを全て食べ終えた間宮ちゃんの食器を覗いた。

「間宮ちゃん福神漬が残ってるぞ。食べないのか？」

コクリと頷く間宮ちゃん。

「宇宙への還元です」

——宇宙も迷惑だろそれ。

今日もストレスの溜まる給食は、魔法が掛かってしまったかのよう
に時間の流れを緩やかにする。

登校のタイミング

いつもと何ら代わり映えのしない朝。変化の無い朝食。テレビからは地元のニュースをこれでもかと言わんばかりに掘り下げるご当地番組が流れている。デジャヴなんかじゃない。俺は昨日も一昨日も今日と同じ朝を経験していた。

しばらくテレビを眺めていてわかったことは、今年は地元の農業が豊作だという事。どこかの国の踊り子たちとは違って心から喜んでいるであろうナチュラルな笑顔の素敵なアナウンサーが速報で伝えた。まあ、だからといって俺の食べる量が増えるわけでもないのだけれど、それでも不作よりは嬉しいと思えるのはきつと俺も平和ボケしたこの村の一員だからだ。

——そろそろ行こうか。

時刻は八時ちょっと前。見たくも無い占いを放送しない地元テレビはその点で他の放送局よりも立派だと思う。信憑性の不確かな占いよりも、我がアナウンサー景子サマの『今日も一日元気に過ごしてください』という若干上から目線の温かいメッセージの方が、単純な村人たちにはよっぽど効く。

玄関に置きっぱなしにしていたスクールバッグを手にとると、母さんに一言。

「行ってきます」

「はい。行ってらっしゃい」

母さんは手を振って返事をした。俺は知らないフリをしているけど、母さんは昼下がりになると、父さんには内緒で、海外ドラマに出演している俳優に熱を上げているんだ。そんな暇を持て余した団地妻。父さんは母さんにぞっこんだ。

玄関を開けると、朝にも関わらず午後の体育終わりのような汗を掻いている健が待ちくたびれていた。細い女子の太ももよりも太い腕を伸ばすと、懸命に右手の甲で汗を拭う。拭っては溢れ拭っては溢れ、たちの悪いもぐら叩きよろしく汗叩き。その手にはチョコレートとキャラメルがミックスされた有名な棒状のおかしを装備。健は漫画やアニメに出てくるデブキャラを完全に網羅していた。

「朝からよくそんなに濃いものが食べれるな」

「ふふっ、なんせ僕はスニッカーズ使いだからね」

俺が玄関から出てくるまでにネタを考えていたのか、少し面白い冗談。ツボには入らなかったけど合格点。健は短剣を持つかのようにはスニッカーズを構えると、俺に向かって一振りしてみせた。すると、包んでいた銀紙から中身だけが分離。大切な部分は綺麗な円を描いて宙を舞う。

「どうわああああ——！」

茶色い物体が『べちよ』と不気味な音を立てて着陸したのと、健が野太い悲鳴を上げたのはほぼ同時だった。

「えーと、なんていうかその、ご愁傷様です」

健の一番の親友からの精一杯のメッセージ。

「僕これがなかったら今日を過ごす自信が無いよ」

操作ミスで大切な装備を旅の道中で捨ててしまった元スニッカーズ使い。深い悲しみと苦悩が健を襲う。これを機に豆腐使いへとジョブチェンジしてくれば俺のあらゆる心配も消えるのだけど、こればかりは本人の意思が重要だ。

「憲司君、これから田中商店に一緒に行かない？」

「俺の勘違いじゃなければ、おまえはまだ懲りてないのか？」

「誰がなんと言おうと僕はあれが大好きなんだ」

遅刻覚悟で駄菓子屋に行こうだなんて、健はやっぱり間違いなく、誇り高きスニッカーズ使いだ。

眠り姫の惰眠

国語の授業が開始して五分ちよつと。休み時間までは騒がしかった目の前の席の女子は肩を揺らしながら寝息を立てている。アホな発明品だけでなく、脳内で大量の睡眠薬をも生成しているこいつは今日も絶好調のようだ。

――起きろ起きろ起きろ。

美沙の背中に向かって念じてみた。もちろん俺にはテレパシーなんていう胡散臭い能力なんて備わっていないし、美沙にもあるとは思えない。鉛を体中にくくり付けているぐらいの鈍感な人間に、繊細な能力が備わっているわけがないからだ。

しかしこいつにとって国語は一番必要な授業。『私には必要ない授業』なんてことを本人は力説しているけど、その分誰かが迷惑していることを理解してほしい。

――そこのトリッキーな女。今すぐ起きて授業を聞け。

物理的手法によって起こすと機嫌を悪くするため、超能力的手法でのアプローチを続ける。と、くだらない。これじゃ俺も授業に集中していないのと同じだ。ミイラ取りがミイラになってどうする。

「憲司さんさつきからとても五月蠅いです。完全なるゴガツバエです」

隣の席に座る間宮ちゃんからクレーム。

——何も喋ってないんだけどな。

「何も喋ってないんだけどな。って聞こえます」

——おいおい悪い冗談だろ。

「冗談ではありません」

間宮ちゃんは俺の方を見ることなく、机に広げた教科書を見つめたまま。どこか他の人とは違うと思っていたけど、まさかここまでとは。

「間宮ちゃんは人の心が読めるのか？」

「あの方は常に私たちを見守ってくださいています」

——どの方だよ。

「宇宙を統治する方です」

理解しがたく、難易度の高い現代文。中等教育の国語の時間に常用語とはかけ離れた日本語が飛び交う。そう、ここは電波の最前線。NASAのお迎えを激しく希望する。

「そこっ、うるさいぞ！ 授業に集中しろ」

先生に怒られた。あとちよつとで間宮ちゃんを論破できたのに。

……嘘です。先生席替えしてください。

「すみません。こいつも今すぐ起こすんで」

そう言っ
て俺は美沙の背中を叩こうとした。
が、先生の望みは違うようで、

「こらっ、古橋！ 藤堂を起こすんじゃない」
と言った。

「はい？」

「藤堂が起きるとうるさいだろ」

——ザツツライト。

田舎の美少女ここに極まれり

退屈な授業を乗り越え、現在放課後。場所は図書室。正確に言う
と返却窓口前。目の前にいるのはクラスメイトであり、図書委員で
もある七瀬だ。いる、というよりこれも正確に言えば寝ているとい
う意味で、七瀬は自分のメガネを分厚い本の上に置き、コクリコク
リと頭を揺らしながら自分なりの夕方を過ごしているようだった。

俺は近くにあったパイプ椅子を七瀬の前に運んでくると、そこに
座った。刹那、パイプの軋む音がした。けれど疲れているのか七瀬
は不快音を気にすることなくぐっすり眠っている。

薄暗い図書室に差し込む窓越しの光。

静かな室内に響く空調の音。

耳を澄ませば時計の針の音までもが聞こえ、

さらに耳を集中させると七瀬の寝息の音が聞こえる。

それに加えて辺り一面古本屋に似た本の匂い。

ほんのり甘い香りがするのは七瀬のせいだ。

——これじゃあ本返せないな。

右に傾いたと思いきや、すぐに左に持ち直す七瀬の頭部。クラス
の誰かが、メガネがあつてこそその七瀬茜だと顔を真っ赤にして力説
していたけど、俺はメガネをはずした七瀬も十分一流クラスだと思
う。要は趣味の問題だ。

「うにゃ。メガネ……飛んだ」

目の前にいる青い男子、すなわち俺に吹きかけるようにして放つ寝言。俺の心臓は耳元まで移動してしまったのではないかと思うほど、大きな鼓動を打つ。もし目の前にいる少女が耳を澄ませば、きっと俺の生き急ぐ鼓動は聞こえてしまうだろう。ドンパドウドウンパ。

すると突如、器用にバランスを取っていた七瀬の頭が体の中心から右に勢い良くオーバーラップ。その先に支えがないことを第六感で感知した七瀬は体を中心に引き戻すと目を覚ました。

「よう、七瀬。おはようさん」

俺が声を掛けると、目の前に知らない人間がいたのに驚いたのか、七瀬は本の上に置いてあったメガネを手にとった。知らない人間というのは言葉どおり俺を知らないという意味じゃなくて、七瀬がメガネを掛けていないときははっきり人間を識別できないということだ。

「え？ 古橋君？ あっ、その。ごめん。寝てた」

「そんなことは見りゃわかる」

七瀬は俺の持っていた本を受け取った。これで返却完了。

「古橋君ってほんとうこういう本好きだよね」

七瀬は俺の借りた『心理学で相手をコントロールする』という本をパラパラとめくりながら言った。

「幼なじみがちょっとアレだろ？ だから脳を修理してやろうかと

思って」

「ああ、確かに美沙ちゃんはやっと癖があるからねえ」

この前もあいつにヘルメットをはめられて一日中吐き気が止まらなかった。しかもそれに対するお詫びの言葉は何一つなく、しまいには『あんたの失敗は後の成功となる。無駄にしないわ』といい放つ始末。正確には『俺の失敗』じゃなくて『おまえの失敗』だろと問い詰めたいところだけど、なんせあいつは日本語が不自由だ。それも仕方ない。

「その点、七瀬は癖がないから付き合いやすくて楽だぜ」

「でもキャラが薄いつて言われるのはちょっと悲しいかなあ」

確かにあの濃い者揃いのクラスの中でキャラを確立するのは誰でも難しい。それに俗に言う『あつ、いたんだ』キャラである七瀬なら尚更。田舎生まれ田舎育ちのダイヤの原石は、その輝きを秘めたままだ。

「そうそう、私また新しい小説書いたんだよ。読んでくれる？」

「おう。もちろんだ」

七瀬が差し出したのは紐で表紙までしっかり留めてある原稿用紙。中身を少し捲ると手書きだけれど丁寧な字で綴られていた。

今日は金曜日。家でゆっくり読んで、月曜日に感想を聞かせてやろう。

シンデレラを確保せよ1

事件が起きたのは昼休み。現場は二年一組の教室。学習発表会などという学校側の自己満足を得るためのイベントが二週間後に迫っていた時期だった。

黒板には雑な字で『決定』の二文字。そのわずか下に『古橋憲司』と『藤堂美沙』の計、八文字。全部合わせると十文字。そんなことはどうでもいい。現実から逃げるな俺。

「異議のある人は手を挙げてくれ」

クラス委員長である新田の問いかけに俺は、九十度の角度から肘を外側に抜くようにスライドし、腕を垂直に立てると二の腕に力を込めて真っ直ぐ手を上空に押しやった。それはまるで、質問する時には手を挙げるというルールを覚えてたての児童のような綺麗な挙手。なんせ俺には大いなる異議があるのだ。丁寧に越したことは無い。

「よし、誰も異議は無いようだな」

——おい！ 無視かあああい！

「新田。おまえには俺のこのスタイルの良い白鳥のような美しい挙手が見えないのか？」

「ごめんごめん。で、何かな王子様？」

そう。この議論がそのまま終了してしまったら、今日から二週間俺は王子様なんだ。名前よりも決定の二文字よりも大きな字で黒板

に書かれている『シンデレラ』。パニックを起こすのも当然だろう。ジョン・F・ケネディ元大統領暗殺事件並みの陰謀だ。

「美沙、おまえもなんか言えよ！ このままじゃおまえはシンデレラだぞ」

俺は目の前に座る美沙の椅子を両手で掴み、力いっぱい揺らす。

「多数決で決まったことに文句を言うのはナンセンスだわ」

俺が引き起こした震度6弱にも動じず、美沙は振り返ると人差し指を俺の額に突きつけた。本当にやりたくないことは手製の毒を盛ってでも拒否する美沙のそんな回答。どうやらまんざらでもないようだ。

——素直にやりたいって言えよ。

「おまえはシンデレラでいいとして、王子が俺だぞ。いいのか？」

美沙は俺の質問を聞くと体を自分の席に戻し、

「別に。あんたの好きにしたら」

と呟くように言った。とんだツンデレラだ。

「決まりだね。二人ともがんばってくれ」

ゲームセット。拍手喝采と共に主役選定の議論は終了。今の俺には到底出せない新田の爽やかな笑顔が憎い。

とりあえず簡単に黒板に書いてあることをまとめると、劇のタイトルは『新・シンデレラ』で、脚本は図書委員の七瀬。シンデレラ役が美沙。王子役が俺。魔女役に間宮ちゃん。そしていじめ役の姉は何故か健。裏方も含めると、しっかり二年一組全員が参加するようだ。

本番まで二週間、俺は今日から王子様をすることになった。

シンデレラを確保せよ2

学習発表会まで残すところ一週間。突如、風物詩の泣き声が消えた。どうやら地上のセミはさつきまで鳴いていた一匹で最後、全滅してしまったらしい。しかし終わった季節を感傷する余裕は今の二年一組には無いようで、最近放課後をフルに活用しながら『新・シンデレラ』の立ち稽古を進めている。

俺はトイレで手を洗うと、水を両手に溜めて顔を叩きつけるように洗顔した。田舎の中学校ならではの山水を使った冷たい水が気持ちいい。

二年一組の教室前。少し裾のほつれたズボンと、少しシワのついたシャツに、これまた少し汚れた上履きを履いた生活観丸出しの大衆慣れした王子様のご帰還だ。

しかし扉一枚を挟んでやけに五月蠅い教室が、ドアを開けるために伸ばした手を引っ込めた。そこからは二年一組の決定事項であるお題『新・シンデレラ』のセリフではありえない『たまらねえ!』や『深いっ、深すぎる!』や『グッジョオオブ!』などという意味深な文字が漏れ聞こえてくるのだ。

——まったく。何をしてるんだあいつらは。

降ろした手をもう一度取っ手に伸ばすと俺は扉を開けた。すると、廊下から聞こえていた内容とさほど変わらない文章がサラウンド効果と相まって俺の耳に入ってきた。

「うぎゃああああ——!」

「うっ、うひょひょひよ」

「そこです女王様 あああ」

——どこだよ奴隷野郎。

どう考慮しても、二週間後に行われる学習発表会で見せる劇の稽古には見えない。一万歩譲ってシンデレラのお話に竹刀による立ち回りと意味深なあえぎ声があったとしても、そこで暴れまわっているのはシンデレラ役の美沙だ。役だから結婚してやるが、俺がもし本物の王子なら間違いなくこいつを国から追放する。そんなじゃじゃ馬に竹刀で叩かれて喜んでいるドM男子がクラスにいるということは真に残念なことだが、今は犯人探しをしている場合じゃない。

「ストレスだわ！ ストレスだわ！ ストレスだわ！」

シンデレラは教壇で、野球の出来ない女子がバッティングセンターでバットを大振りするかのようにな度も男子たちを竹刀で叩く。もちろん七瀬の書いた脚本にはシンデレラが更年期障害によるストレスを抱えているなんていう設定はされていない。

「で、この有様は何だシンデレラ」

「あつ、憲司。あんたいいところに帰ってきたわね。ちょっと聞きなさい」

王子を見つけ、少し落ち着いた様子のシンデレラ。

「おまえの話よりまず、どうしていじめ役の姉である健が泣いているのか教えてくれ。配役的に見ても泣くのはおまえの方だろ？」

大切な初めてを散らされてしまった女子のように『おいおいおい』と教室の隅ですすり泣きをしている健。しかしそんな状況にあっても田中商店で仕入れた大切なスニッカーズを口に運ぶことは忘れない。

「私が泣かしたわけじゃないわ。必ずしもシンデレラが苛められるという設定に納得がいかないと抗議しているだけよ」

——おまえはいつたいシンデレラの何を期待してシンデレラ役を引き受けたんだ。

まるで、カタカタ言い始めた破損直前のハードディスクのような脳みそをしている美沙の真意は読み取れない。それも計算はできるけど空気の読めないノートパソコン。意味のわからない再起動の要求に苛立った経験は誰しもあると思う。こいつはそんな風にユーザーを苛立たせるような人間なんだ。

「どうしておまえは必ずしも自分の意見が正しいと思う」

クラス中のみんなが俺の疑問に同調してくれたのか、一斉に静まり返る二年一組。誰かの唾液を飲み込む音までもが聞こえる。加えて重苦しい緊張感。けれど、ここらで聞いておかなければ劇の方向性はとんでもないところへ進んでしまう。所詮、美沙にとってクラスメイトたちは将棋盤の駒のようなものだからだ。

そして、美沙はそんな横一列に並んだ『歩』たちを見下ろすように教壇に立つと、机を両手で思いっきり叩いて、

「私は私の才能を信じてるの」

と一言。今回の学習発表会、ただでは済ませてくれないらしい。

シンデレラを確保せよ3

問題児ばかりの集まっている二年一組が劇をするというのだから、他のクラスが興味を示すのも当然だ。俺も隣の二年二組に所属していれば、この余興を楽しみに来ていただろう。

体育館に広がる観客の歓声とは対照的に、幕の裏に立ち尽くす俺。マイクの確認をするナレーションの新田。役者たちに最後の指導をする七瀬。開演の瞬間は刻々と迫っていた。

——本当にこれでいいのか？

俺はタンクトップ一枚にルーズなジーンズを履いて体育館の壇上裏に立っていた。露出度の高いタンクトップから伸びる腕にはタランチュラのデザインの施された刺青シールが貼ってあり、首にはドクロのチェーンが二重に巻きつけられている。そして極めつけは両指にはめているメリケンサック。体中に装備したアクセサリたちがギラギラと下品な光を放つ。それは近所のばあちゃんが今の俺を見たら『鬼が出た』と騒ぎ立てそうな様相だ。

そんな王子に対し主人公のシンデレラはというと、これも俺に引けを取らずとんでもないのだが、紹介は後回しにしよう。本番を見てもらうのが一番いい。なんせ情報量が多すぎてどこから説明すればいいのかわからないのだから。

開演十分前。幕の閉まった壇上では慌しく働く裏方と、思い思いの方法で緊張を緩和しようとしている役者陣がスタンバイ。俺は口をモゴモゴ動かしている健を見つけると傍に寄った。

「健、緊張してるか？」

「だっ、だいじょぶ。これがあるしね」

シンデレラの姉役の健はいつも手にしている高カロリーの食品を俺に見せるときこちなく笑う。健の場合、暴飲暴食じゃなくて暴食暴食だ。少し水分を取った方がいい。

「憲司君はカツラがなくていいなあ。僕なんかこれのせいで汗が止まらないよ」

健は人差し指を自分の頭に指した。明らかに後回しにされたであろうボロボロの長髪ウィッグを頭にはめている。しかし頭頂部の繊維は綺麗に剥げ落ちていて、それはまるで落ち武者の様。そしてそれを見た誰かが健の豊満な巨乳と落ち武者を合わせて『キョニウムシャ』なんて呼んでいたけど本人は気にしちゃいない。むしろダメージは健のバストを確認した貧乳の女子へと行ったようだ。と、そんな人間もどきが姉なのだから、俺がシンデレラだったら間違いなくグレているだろう。姿、形といい、脚本側の健への期待が一発で見取れる予算編成だ。アイラインを引いた精一杯の激安メイクがなんとも痛々しい。

他の役者たちとは離れたところで独り言をしているのは魔女役の間宮ちゃん。目元をすっぽり隠した帽子に、漆黒のマント。宇宙のエネルギーを最大限に受けている彼女に緊張は無縁のようだ。

垂れている幕から観客たちを覗くと、クラス数が少ないとはいえ、体育館にはほぼ全学年の生徒たちが前評判（とんでもないやつらが劇をやる）を聞いて集まっていた。誰かが三年でヤンキーの神崎先輩も見に来ているから半端なこととはできないと動揺していたが、俺はここまで来たら笑わせてやろうと思ってる。

一分前。それぞれが悪あがきにしかない確認をやめると、壇上の中央にいた美沙が大きく手を一回叩いた。変態でも緊張するか、どこか神妙な面持ち。

「みんなっ、集まりなさい」

——いつからリーダーになったんだおまえは。

クラス中の注目を浴びた美沙は、

「二週間私についてきたことを感謝するわ」

と、最大の敬意を表して深く頭を下げた。

次に顔を上げたときには神妙な面持ちは消え、そこにはやんちゃなシンデレラの笑み。

「あなたたちの努力は無駄にはしないわ。絶対に成功させるわよ！」

美沙が鼓舞した。

それにレスポンスするように、アルト、ソプラノ、テノール、バス、いろいろな声質が混ざり合った全員の雄たけびが壇上を突風のように突き抜けた。これだから二年一組はやめられない。最低だ、ど最高だ。

デコボコだらけの俺たちの二週間の成果は今、実る。

新・シンデレラ

むかしむかしあるところに、顔面偏差値72、学力偏差値39のとても美しいだけ取り柄の少女がいました。そんな彼女の名前はシンデレラ。町を轟音でとどろかせるレディースチーム『神出レ羅』のリーダーです。

母子家庭であるシンデレラは今日も、十時には帰りなさいという母の言いつけを守ることなく紫色の派手なドレスに身を包み、夜遅くまで馬を乗り回していました。

「全員、今すぐ私の馬に轢かれなさい！」

美しい顔から発せられる下品な言葉は、マニアックな一部の男性を除き、ひどく軽蔑されるものでした。

そこで町中の男性たちが思います。姉のタケルは落ち武者のように頭頂部が禿げていて不細工だけれど、性格は拔群なのだから二人が入れ替わればいいのにと。

「あんたたち、ふざけんじゃないわよ」

それを風の噂で聞いたシンデレラはアルプス山脈よりも高いプライドを傷つけられ、ますます荒れてしまいました。加えて、姉に家庭内暴力までもが及ぶようになったのです。

姉はシンデレラに竹刀でお尻を叩かれ野太い声で鳴きます。失礼、泣きます。

「しくしくしくしく……」

（美沙ちゃん、リハーサルより強いよお）

「ほらっ、もっと声を上げて鳴きなさい！」
(我慢して叩かれなさい)

毎日の日課となった行為に、姉の頭頂部はますます薄くなつてしまいました。

そこでシンデレラの傍若無人に耐えかねた姉は妹を更生させようと、町の様々な偽善者たちを家に連れてきます。

元暴走族総長、寺の住職、レンタルお兄さん。しかし、どの偽善者たちもシンデレラの凍てついた心を溶かしてあげることは出来ませんでした。

しかし一つ目の奇跡が起きたのは姉が、元から割れているお尻が竹刀によってさらに深く割れたのでお嫁に行けないと嘆いている時でした。シンデレラは姉がお嫁に行けない理由はもっと他にあると言おうとしましたが、目の前を通りかかった美男子を見ると口が開かなかったのです。

「まさかあのタランチュラの刺青は、かの有名なケンジ王子!？」

ケンジ王子は両指にメリケンサックをはめ、町に存在する気に食わないものを片っ端から破壊していきます。ケンジ王子が腕を一振りするたびに首に巻かれた髑髏のネックレスは揺れ、同時にシンデレラの心も揺さぶられるのでした。

「ちょっとそこの女の子。城に帰るための馬がないんだ。乗せてくれないか？」

突然ケンジ王子に指名され、心躍るシンデレラ。しかしシンデレラは性格上素直になることが出来ません。

「あつ、あんたが乗りたいなら……私はいいけど」

「サンキュー。おまえ面白いやつだな。名前は？」

「……シンデレラ」

「わりい、よく聞こえないんだけど」

「カタカナの『シ』にカタカナの『ン』にカタカナの『デ』にカタカナの『レ』にカタカタの『ラ』でシ・ン・デ・レ・ラ！　ここまで言わせて忘れたなんて言ったら怒るから」

「了解、シンデレラ。城まで頼むよ」

まさかケンジ王子を自慢の改造シートに乗せることが出来る日が来るとは夢にも思っていなかったシンデレラは恍惚とし、いつもの刺々しい威勢は牙を潜めます。

「あら、みなさんごきげんよう。今日もいい天気ね」

ぎこちないもののシンデレラの言葉遣いは穏やかになり、ケンジ王子を背に颯爽と馬を走らすのを見た町中の男性たちは、ついにシンデレラと姉の中身が入れ替わったと大喜びしました。

そして姉は誤解した男性たちに竹刀で叩かれます。もはや顔の悪くなったシンデレラに、男性たちは躊躇がありません。

「ごっ、誤解なんです。私はタケル、みなさん信じ……うっ、うはっ。痛いっ」

乗馬している二人はそんな姉をよそに様々なデートをしました。
お花畑に海岸、城に招待されたときはシンデレラの胸は高鳴り、破
裂しそうなほどでした。

素敵な服を着て、おいしい食事をいただき、美しい演奏をいつま
でもケンジ王子の隣で聞いていたいとシンデレラは心の底から思っ
ます。

そんなシンデレラとは打って変わって、姉は男性たちに思う存分
今までの鬱憤を晴らされています。それに飽きた男性たちが姉の前
から姿を消すと、そこに一人の魔女が現れました。

「私の名前は魔宮。あなたはあなたの存在を確信していますか？」

少しどころか大いに癖のある魔女は姉に問いかけました。

「シンデレラは美人で、ケンジ王子とも仲がよくて、それなのに私
は……」

「望むのでしたらシンデレラと中身を入れ替えて差し上げましょう」

魔女は姉が入れ替えて欲しいと一言も言っていないのに、両手を
天にかざすと呪文を唱えました。すると月から一筋の光が現れ、姉
を包みました。

翌日、シンデレラが目を覚ますと妙に肌がカサカサします。それ
に髪も異様に軽くなった気がしました。特に頭頂部が。すぐに鏡で
自分を確認すると、そこにいたのは姉タケルの姿をしたシンデレラ
でした。ケンジ王子はシンデレラがそんなことになっているなんて
気づきもしません。

それどころかケンジ王子はシンデレラの姿をした姉をデートに誘

ってしまったのです。シンデレラはとても傷つき落ち込みました。そこでシンデレラは少しでもケンジ王子の気持ちを引き付けようと、姉の体でケンジ王子とお揃いのタランチュラの刺青を彫ることにしました。

奇跡はシンデレラがタトゥーショップから出てきたときにまたしても起こりました。広場ではケンジ王子と自分の姿をした姉がデートをしていたのです。それを見て、いてもたってもいられなくなったシンデレラは思わず駆け寄りました。

「誰だおまえは？」

ケンジ王子はみすばらしい姿、格好をしたシンデレラを指差して言いました。

「わっ、わたしは……その、シンデレラなの」

うまく説明することの出来ないシンデレラを見て、ケンジ王子の隣にいる姉はニヤリと笑いました。姉は美しい容姿を手に入れ性格が曲がってしまったのです。

見た目がシンデレラとなった姉が言います。

「王子様。愛していますわ。だから早くその者を捕らえてください」

次に、見た目が姉となったシンデレラが目には涙を浮かべて言います。

「あんななんか別に……好きじゃないんだ……から」

二人の言葉を聞いたケンジ王子はあることに気づきました。

「俺の知っているシンデレラは、泣き虫なんだけど強がりで、寂しがりなんだけど素直じゃなくて。そういう可愛くないけど可愛いヤツなんだ。本物のシンデレラは君だ」

そう言ってケンジ王子がシンデレラの荒れた手を取ると、その瞬間シンデレラと姉に掛かっていた魔法は解けました。ケンジ王子の言葉が魔女の魔法を打ち破ったのです。

元の姿に戻ってしまい悔しがる姉は、望んでもいないのに自分の体にタランチュラの刺青が掘ってあることに慌てふためきました。

「シンデレラ。俺のことが好きか？」

「……嫌いじゃない」

「そっか。俺はそんなシンデレラのことを大好きだ」

王子は耳まで赤くなったシンデレラに微笑みかけると、そっと口付けをしました。

これはむかしむかしあるところに住んでいた、意地っ張りで素直じゃない顔だけが取り柄だった美少女のお話。

おわり。

脚本・七瀬ひかり

ナレーション・新田一樹

女子の駆け引き

大きな王冠の中心にシンボルである校章が乗っかっているというセンスの悪いトロフィー。学習発表会の最優秀賞受賞当日、みんなが自分の所有物にしようと奪い合っていたのが恥ずかしい。それも三日経った今じゃ、ロッカーの上に無造作に転がっているという始末だ。熱しやすく冷めやすいという二年一組の特徴が良くわかる。しかも最優秀賞を取った歴代の先輩たちが書いた『レジェンド』や、また違う先輩たちがレスポンスするかのように書いた『ニューレジェンド』などという意味のわからない落書きがトロフィーの価値と二年一組のテンションをジンバブエの貨幣価値の如く急降下で落としたんだ。

イベントも終わり全身が栄養ドリンクで出来ているんじゃないかと思うような元気のいい女子を除いて、普段以上の静けさを取り戻した教室。お互い疲労感でいっぱいだ。お疲れ様です。

「古橋君、ちょっといい？」

HRと一時間目の授業が始まるまでの微妙な時間帯。今日はフレームの青いメガネを掛けた七瀬が俺の席を訪問した。気になるのは両手を背にして何かを隠していること。

「ん？ また新しい小説でも書いたのか？」

「ううん、違うよ。あっ」

七瀬は俺の質問に右手を振って否定すると、背に隠していたもの

も掴んだまま振ってしまっていた。そんな女ゴルゴは今日も高度なテクニクで男子たちの純情ハートを狙い撃ちだ。

「見えちゃったね。これなんだけど、古橋君はクッキーとか好き？」

七瀬が手にしていたのは白を基調としたピンクのストライプの入ったかわいらしい包み。袋のキャパシティ限界まで詰めたのか不格好にポコッと膨らんでいる。

「おう。嫌いじゃないよ」

「あつ、でもさっき振っちゃったから崩れちゃったかも」

「そんなこと気にする仲じゃないだろ。味は変わらないし」

「でも形は重要な」

「いやいや、食いもんは味だろ？」

——七瀬は何をこだわっているんだ。

「んー、じゃあ一応机に置いとくね。いらなかったら捨ててもいいよ」

七瀬のそんなちよっぴり投げやりな態度。

思春期の女子の気持ちを少しでも早く理解したい俺は、七瀬が机に置いて行った包みをすぐさま開いた。中には黄金色をしたハート型のクッキーがたくさん詰められている。その全てを確認すると崩れている様子はない。と、同時に走り出す俺の思考回路。七瀬がクッキーをくれる＋ハート型＋形が重要Ⅱこの前の劇で準主役を演じ

たお礼だろう。確かに脚本を担当していた七瀬はあれから演劇部のオフアールが来たし、それで本人も喜んでいた。そうだ間違いない。

「憲司、見てたわよ」

ふっふっふつと不気味に肩を揺らし、美沙は俺に背を向けたまま話しかけた。

「おまえには背中が目がついているのか？」

「そうよ。だからあんたがいつも私のブラウスの下の何かの色を識別しようとしているのもお見通しだわ」

「自意識過剰じゃないのか。おまえは寝ていなくても寝言が言えるんだな」

寝ていても寝言。起きていても寝言。そんな夢の世界に取り付かれてしまった幼なじみは、俺の挑発的な態度にイラッとしたのか、座ったまま振り返った。

「で、本当はどこから聞いてたんだ？」

「今度デートしようってあたりから」

「そんなことは一言も言ってない。何度も言うが寝言は寝て言え」

「じゃあ私とする？」

——それも寝言と同義だ。

「しねーよ」

「今のしねーよは『死ねよ』なの？ それとも否定形の『しない』なの？ 非常に聞き取りづらいわ」

「うん、どっちが正解でも俺は困らないぞ」

この言葉が美沙の怒りに触れ、俺は一時間目のチャイムが鳴るまで美沙の尋問に耐え続けることになった。許してくれ。劇で結婚した仲じゃないか。

連絡網で包囲網1

土曜日。わざわざ報告するほどのことでもないのだが、今から俺の取り留めのない話を聞いて欲しい。もちろん君が野郎の戯言なんて聞く暇がないと言うのなら軽快に次の話に飛ばしてもらってもかまわない。一話飛ばした先には美少女七瀬との会話が待っている。そんな君はそちらに期待してくれ。

事の発端は美沙からの電話。自宅のディスプレイ付き電話には『幼なじみ以上、友達未満』で振り分け登録してある美沙の番号が表示されていた。俺は右から左へと幾度もディスプレイに映っては消えていく番号を見つめる。

十秒。

三十秒。

一分。

一分三十秒。

二分。

電話が鳴り止んだ。

と思いきや再び、

十秒。

三十秒。

一分。

ストーキングと行動が紙一重の美沙は強く俺を求めているらしい。なかなか受話器を取らない俺に対して足踏みしている美沙の姿が目につく。

俺は一分と三十秒で電話に出た。

『遅いわよ。いつもスリーコール以内には出なさいって言ってるでしょ』

——何様だおまえは。

「もし受話器を取ったのが俺じゃなくて母さんだったら、その悪態をどう誤魔化す気だ？」

『誤魔化す？ そんな必要ないじゃない』

確かに。こいつと俺の関係は幼稚園児の頃から何も変わらなかった。それに母さんは昔から美沙の性格をかわいいと言って喜んでい
る傾向がある。息子が振り回されてよろこんでいるなんて、やっぱり母さんは変わってる。

『それより何で電話に出なかったのよ』

「わりい。ちょっと忙しくてさ」

幼なじみ以上友達未満の人間に吐く大嘘。でも、新田の父さんが村長選立候補のときに提示したマニフェストよりは格段にマシだ。そこには都市に流出してしまった若者を村に呼び戻すと書いてあり、力こぶを見せた新田父が柔らかいタッチのイラストとなつて描かれていた。はつきり言おう、無理だ。せめて村にちゃんとしたカラオケを作ってから言ってくれ。俺たち若者はもう、J-POPの新曲が配信されていないカラオケもどきのスナックで歌うのにコリゴリなんだ。

美沙との電話は続く。

『私の言いたいことを当ててみなさい』

「宿題を持って来いなんていう出前じゃないだろうな？」

『打ち上げをするわよ』

美沙がそう言うのと、受話器から美沙以外の声が聞こえた。恐らく母親である理沙さんの声だ。

理沙さんが『ちよつと美沙ちゃん。そんな言い方じゃなくて、一緒に学習発表会の打ち上げしませんかって誘えばいいじゃない』と言うと、美沙は『お母さんには関係ないでしょ！ そんな優しい言い方したら憲司は絶対断るわ』と言った。すると理沙さんは『憲司君も美沙ちゃんのこと好きなら来てくれるわよ。うふふ。ついでに好きって言っちゃえ美沙ちゃん。ほらっ』なんて会話が聞こえ、美沙は『もうっ。あんまり大きい声で喋ると憲司に聞こえちゃう』と言った。案の定、丸聞こえだ。俺はこのやり場の無い気持ちをどうしたらいい。

『つと、待たせたわね。ちよつとお母さんがうるさくて』

——知ってる。

俺のテンションはクライスラー車の販売台数の如く急降下してしまっていた。

『聞ってるの？』

「おっ、おう。で今更打ち上げなんてどういうつもりだ？」

『いいからやるのよ。いつものメンツを集めておきなさい』

「はい、女王様よろこんで。と居酒屋の店員みたいにかしこまるとでも思ったのか？　なんで俺がそんなことしなきゃならんのだ」

俺が拒むと、電話越しでもはっきり伝わる美沙のため息が聞こえた。

『……みんな全然私の電話に出ないのよ』

——普段の行いのせいだろ。

『今度からあいつらにGPSを付けさせてやるわ』

とんでもない中二だ。末恐ろしい。

『じゃあ頼んだわよ。なにかあったら電話掛けなさい。……あつ、そうそうお金は要らないからって伝えて。じゃ。……あつ、場所はお好み焼き屋よ。田中商店の近くの。わかったわね』

美沙の言いたいことだけのオンパレードで電話回線は終了。プツツと音がした後、ツーツという音に変わった。これなら俺が電話に出るまでも無く、留守電に吹き込んでおいてくれれば十分だ。

どうやら美沙はまた何かを始めようとしているらしい。

連絡網で包囲網2

美沙からの一方的な電話が切れた後、一分も経たないうちにまた同じ人物から電話が鳴った。うちは苦情専門のコールセンターじゃない。少し電話を休ませてやってくれ。

受話器を取ると、美沙は『あんたのせいで集合する時間帯を言い忘れた』と逆ギレ。話の内容によると日時は明日で時刻は夕方の五時。好み焼きをおいしく食べるために健の間食を阻止しろという命令付きだ。自信は無い。

俺は美沙から受けた電話を一度切ると、健の自宅に電話を掛けた。繋がるのが遅いが大丈夫、健ならきつと参加してくれる。

『はい。もしもし憲司君?』

「ん、そう憲司。夜遅くに悪いな」

『ううん、そんなことないよ』

俺は、夜遅く以上に悪いんだが。と前置きをして今回の電話の趣旨を繋げた。一つ目に打ち上げをやるということ、二つ目にお好み焼きを食べるということ、三つ目に日時。そして最後に間食をするなど強く念を押す。

『わかったよ。明日はスニッカーズ使いを封印だね』

古いネタを引っ張る健。俺の笑い声が聞こえなくて不安に思ったのか慌てて他の話題へとシフトチェンジした。やり口が少々強引。

けれど触れないことも一つの優しさだと思う。

『あそこのお好み焼き屋は安いから僕みたいな中学生でも入りやすいんだ』

「いや、美沙が言うにはお金は必要ないらしいぞ」

『え？　それほんとなの？　助かるなあ』

改めて聞かれると自分で言っただけで不安になる。お金も無しに飯を食おうだなんて、あいつはこの資本主義社会の構造をなめているんじゃないのか、と。また、美沙から電話を受けたときにお金はいらないと言われて疑問を感じなかった俺も同類なんじゃないのか、と。

「まさか美沙が食い逃げをするほど非常識な人間だとは思わないが、一応気をつけたほうがいいな」

『むっ、無理だよ。僕足が遅いし』

——誰も逃げる準備をしろだなんて言っていない。

それにこの村の住民は知り合いだらけだ。仮にうまく逃げ切ったところで翌日補導されるのがオチ。顔は割れてるんだ。しかも下手したらニュースのネタの尽きた朝の地元ローカルTVで特集されるかもしれない。みんなのアイドルアナウンサーである景子サマを悲しませることはこの村では重罪に値する。

「勘違いするな健。俺が言いたいのは財布を持ってきたほうがいいんじゃないのかってこと。決して食い逃げを推奨しているわけじゃない」

『なっ、なんだー。僕びっくりしたよ』

ホッとしたときに吐いた健の息遣いが受話器を通して俺の耳に吹きかけられた。ボソボソしたした音が不快。俺は、少し受話器から離れて喋ってくれるようにお願いした。

すると健は、新幹線に乗る前にタバコを吸い溜めしているお父さんさながら、日付が変わる前に急いでスニッカーズを食い溜めしておくと言っていると電話を切った。約束は守るつもりだろうだ。

俺は受話器を置くと、近くにあった子機を手にとって自室に戻った。階段を上る途中で母さんが『なになに、子機なんか持ち替えちゃって、彼女に電話?』とはやし立てたが、当然無視。こちらは、渋谷のギャルみたいに語尾を若干上げて『カノジョ』と言っちゃうような母親にする話なんてないんだ。

次に電話を掛けるのは七瀬。これからする話が急で迷惑なだけに、七瀬の大切な時間である小説の執筆中でなければいいと思う。

俺は母さんが聞き耳を立てていないのを確認すると電話を掛けた。別にやましい訳ではないけど、知られると隣に住む根岸さんとの会話のネタにされるから要注意しただけ。

『はいもしもし』

「七瀬か?」

『えへへっ、うちの家族はみんな七瀬だよ』

会話のキャッチボールは初球に七瀬らしいジョーク。俺も負けじと返球する。

「知らなかった。メガネっ子の娘が七瀬で母親が八瀬で父親が九瀬かと思ってたぜ」

それを聞いた七瀬は始めに『ぷふっ』と噴出すと、次に『あははっ』と言い、さらに『一瀬や二瀬は存在するの?』と自問自答するとまた一人で笑い出した。最後に笑い疲れたのか『はあはあはあ……』と青少年をイタズラに悩ます息遣いをかます。電話だからこそ実現した近距離の吐息に耳がおかしくなりそうだ。

『はあはあ……それで、はあはあ……どうしたのこんな時間に?』

怪しい吐息と共に会話は続く。もし母さんがこの会話だけを盗み聞きしていたら、中学生が掛けちゃいけないダイヤルに電話をしているのかと息子を疑うことだろう。それか中学生同士のイケナイ火遊び。後者に関してはむしろ喜びそう。

「俺にもついに赤紙が来たんだ。皇帝からの徴兵令」

『美沙ちゃんのこと?』

——さすが鋭い。

「そう。明日の夕方五時に学習発表会の打ち上げをするんだとき。場所は田中商店近くのお好み焼き屋。美沙が言うにはお金はいらないらしい」

俺が必要事項を全て言い切ると七瀬は間髪入れずに、

『お金が必要ないってどういう意味かな?』

とアップテンポ気味に言った。そりゃそうだ。美沙が実はお好み焼き屋『焼い太郎』の親父さんの隠し子だったとか、愛人でない限りタダで食べれるとは思えない。善良な理由でタダで食べれるほど美沙が普段良い行いをしているとは思えないのだ。

「俺もお金が必要ないというシステムに関してはよくわからないんだ。俺だったら一応財布持ってたぞ」

『そう……だね。美沙ちゃんまた何か勘違いしてるのかもしれないし』

——ナイス判断。

美沙からの伝言を伝えるとその後は、最近の出来事や今日の七瀬のメガネの色、そして新しく書いている小説の設定を聞き出すと電話を切った。通話時間は二十五分。七瀬がアニメ声のせいでアニメを一本見た気分だ。

いつものメンツと言えば残すは一人だけ。そう、不思議少女間宮ちゃん。俺は特別仲がいいわけではないが、美沙のお気に入り。仲がいいというよりは美沙が間宮ちゃんに一方的にアプローチしているだけという感否めないが、不思議人間同士どこか気が合うのかもしれない。

俺はそらで電話番号を言えるほど仲良くないことから、わざわざ一階に戻ってクラスで配られた連絡網を探しに行くことにした。途中、階段を降りているときに母さんが『彼女とはうまくいった？』と聞いてきたが、これもまた当然無視。俺は子機の発信履歴を消すと真相を闇の中に隠した。

それからしばらく棚を探していると、三年前に潰れたピザ屋のチラシに挟まっている連絡網を見つけた。確かに目当ての連絡網ではあったが、そこには間宮ちゃんの番号だけが記載されていなかった。

——仕方ない、諦めるか。

そう思い連絡網を棚に戻した瞬間、タイミングよく電話が鳴った。本当に今日は良く電話を使う日だ。もしかしたら村中の電話回線を独り占めしているかもしれない。

「はい、古橋ですが」

『間宮です。私も行きます』

——何で!?

『憲司さんの心の声が大気圏を通過して届きました』

——大気圏を通過する必要はないと思う。

『あの方の思し召しです』

——だからどの方だよ。

『宇宙を統治されている方です』

——勘弁してくれ。

『容赦しません』

この間、俺はまだ『はい、古橋ですが』としか声に出していない。間宮ちゃんは明らかに俺の心と会話している。このままじゃ現実主義者の俺の心が折れるのも時間の問題だ。

『ではよろしくお願いします』

そう言うの間宮ちゃんは電話を切った。打ち上げの概要は『あの方』を通して確認済みということだ。そして俺はもう『あの方』が誰なのかを追求することはしなかった。世の中には俺の知らない不思議なこともあるらしい。

連絡網で包囲網3

翌日の五時半。予定よりも三十分遅れてようやく全員がお好み焼き屋『焼い太郎』に集合した。待ち合わせ場所に一番に着いたのが健。それに続いて七瀬、俺、美沙の順番。間宮ちゃんがいつからいたのかは誰もわからない。

広大な田んぼを背に店構えしている『焼い太郎』の印象を一言で説明するなら、とにかくボロイ。震度3に耐えられるのかも微妙なところ。そういえば前にクラスの誰かが『あの店でくしゃみをしたら建物が揺れた』と言い、違うやつが『トイレで力む度に壁が軋むから怖くて水も流せねーよ』と続けた。それはさすがに嘘だろう。とんだ営業妨害だ。けれど一応、健には店の中を気をつけて歩いてもらうことにしよう。

「僕もうお腹減っちゃったよ」

健の悲痛な叫び。間食をしないという約束は守りきれたようだ。

「そうね。いいわ。お店に入りましょ」

「ちょっとまで。俺はまだおまえに聞いてないことがある」

俺は歩き出した美沙の腕を掴んだ。細くて華奢な女の子の腕。

「なによ?」

こいつと一緒にいると日々が謎解きだ。そしていつも全ての真相

が明らかになったときはもう遅い。だからこそ最初に聞いておく必要がある。結局迷惑を被るのは俺たちだからだ。

「お金が必要ないってどういう意味……」

「さあ、行くわよ」

豪快な無視。美沙は俺の掴んだ手を振り切ると、タータンチェックのスカートを揺らしながら先陣を切って店の中に入った。お気に入りの靴である白と黒を基調としたラバーソールが歩を進めるたびにコツコツと音を鳴らす。そんな田舎在住のロッカー気取り。J-POPしか聞かないくせに。

健も美沙に続いて、丸い体をバランスボールのように跳ねながら店に入った。店が壊れるからやめてくれ。

「古橋君も行こっ？」

「おう。二人も腹減ってるのか？」

七瀬は『うん』、間宮ちゃんは頭をこくり。着ている服は、メガネ美少女が水色のワンピースで、不思議ちゃんが秋仕様の七分袖パーカー。反応もファッションも対照的な二人が面白い。

——この村にそんなお洒落な店あったっけ？

「私は新宿で買いました」

「新宿ってあの？俺なんか噂でしか聞いたこと無いぞ」

俺の驚きに七瀬も『すごい。間宮ちゃんおしゃれさーん』と共に

鳴して大興奮。間宮ちゃんの履いているスキニー気味のデニムをペタペタと触ると、お次に着ているパーカーの袖口をさわさわ。その手は次第に胸元へと伸びた。平穏な田舎に痴漢現る。

「ひかりさん手が五月蠅いです。ゴガツバエです」

間宮ちゃんが注意したのと、七瀬が間宮ちゃんの胸を自分と触り比べて落ち込んだのはほぼ同時だった。どうやら俺がただの不思議ちゃんだと思っていた少女は隠れ巨乳らしい。

店に入ると、全貌は入り口からでも見渡せるほど狭かった。美沙と健が座っている場所も一目で確認できる。そんな二人はまるで食い意地の張った兄弟みたい。一つしかないお品書きを奪い合ってる。

「あなたたちも早くこっちに来て選ぶといいわ。今日はぜーんぶタダよ」

奪い合いに勝った美沙が俺たちに気づくと、お品書きを持った手で手招きした。

するとそれを聞いていた店長が『美沙ちゃん声が大きいよ。君たちだけなんだから他の客に聞かれないようにしてくれ』と注意した。昨日美沙が電話で言っていたことは真実のようだ。

俺たちは靴を脱いでお座敷に上がると、それぞれが席を選んで座った。俺と間宮ちゃんは美沙の隣。正面には健と七瀬。狭いお座敷だけに適切な振り分けだ。

「俺はてっきり店長を騙そうと子供銀行券でも用意してくるのかと思っただぜ。まあ、あんなんじゃないよこの店長どころか田中商店のばあちゃんでも騙されなと思うけどな」

「だから私はお金は要らないって言ったじゃない。誰も信じてなかったの？」

美沙の問いかけに全員が黙って頷いた。

「なら罰として今から健が小粋なジョークを言ってくれるわ」

意味も無くおしぼりを絞って遊んでいた健に突如向いた矛先。悪魔と鬼を兼ね備えているかのような美沙のフリに小心者の健は涙目だ。

気の利く七瀬は健が唸って悩んでいる間に、みんなから注文を取ってゆく。俺はとりあえず豚玉。基本はやっぱりこれだと思うんだ。ありがとう七瀬。

そして健は迫い詰められた挙句、

「顔がアンパンで出来ているアニメの替え歌を歌います」

と言った。ほぼ間違いなく事故が起きる。俺には予知できる特殊な能力も無ければ、恐怖新聞のように夜な夜な悪霊から残酷な未来を教えてもらっているわけでもない。それでもこれだけはわかる。わかるんだ。

「いきますっ！ ハンッハンッハンバーガー、おーいしい君は、パティとピクルスだけがとーもだちさあー」

粉碎。玉砕。炎上。それも気持ちいいくらいに。その姿はまるで大した特殊効果も無しにあっけない死に方をするファミコンゲームの主人公の様。健もそんな周りの空気に気づいたのか机に敷いたおしぼりに顔を沈める。残りライフはもうゼロだ。

夕方店が込んでいるせいか、しばらく待つとやっと店長がお好み焼きの具の入った器を持って俺たちの机に運んできた。

「おまえたちたくさん食えよ。うちのお好み焼きはうまいからな」

こんなことを言ったらかわいくないけど、はじめからそのつもり。こっちはもうお腹がスパイラルするほど腹ペコなんだ。

「美沙ちゃんが何かわがまま言ったんですか？」

このグループで唯一の良識人である七瀬が申し訳なさそうに問いかけた。

「そんなこたあ気にする必要ねえ」

とにかく店長が気さくな人で助かる。美沙の横暴にかまっているのだから変わっているとも言えなくはないんだけど。

「じゃあおまえたち、後はよろしくな」

「私たちに全て任せておきなさい」

美沙と店長が何かを通じているような内容に、どこか不穏な展開を感じる俺。しかし細かいことを気にしているのは自分だけの様で、みんなはキラキラした輝きを放つ具材たちに目を奪われている。間宮ちゃんの器に至っては、大量の海の幸が零れんばかりに封入特典。サービス満点の付録にコロコロコミックもびつくりだ。と同時に、店長に掛かるロリコン疑惑。身長が140センチであり隠れ巨乳でもあるという、その筋の人たちを完全に納得させるステータスを持つ間宮ちゃんは無敵なのだ。

待つこと数分。熱した鉄板にみんなが一斉に具材を流してゆく。同時に生まれる縄張り意識。俺の望んでいない戦を美沙が仕掛け、負けた俺は敗走し、わずかに残った隅の陣地で生活を営むことに。それから残り全ての液体を一気に流し込むと『じゅわじゅわ』と至極の音を発した俺の豚玉。香る具材の匂いが、ボクはここにいるよと自己主張。下手くそだけど鳴り止まぬ美味しそうなハーモニー。健にいたっては気絶寸前だ。誰か至急こいつにコーラを。

待っている間に何を話したかは正確に覚えていないけど、七瀬が『うちのおばあちゃんは二時間サスペンスが好きなんだけど、いつも途中で寝ちゃうから犯人がわからないんだよ。未解決時間の山だね』って言っていたのは覚えてる。正直、鉄板という名の海に広がる幸を前にしてはどうでも良かった。

それぞれのお好み焼きが完成すると、切れ目を入れてお皿に取り分けた。それから俺は手前にあったマヨネーズを使うと、右回りにそれを回した。俺が使ってから間宮ちゃんが使って、七瀬がちよつと少なめに掛けた後、健が大量に搾り出した。最後に回ってきた美沙が使おうとすると、『プスッ』と音を立ててマヨネーズは息絶えた。

「……これはどういうことなの？」

美沙のマヨネーズを持った手がプルプル震える。健も違う意味でプルプル震えている。前者が怒りで、後者が恐怖によるものだ。

「なんで私のマヨネーズがないのよ！」

美沙はマヨネーズを健の額にグリグリ押し当てると、威圧した。

「わっ、わざとじゃない。間違えたんだよー。ごめんよ美沙ちゃん」

「いいわ。夜道に気をつけなさい」

「ちょっとおお！　どういう意味だよおお。許してー」

引き続くマヨネーズ闘争。面白いから隣の机にもマヨネーズがあることは黙っておこう。

俺は小声で『いただきます』というとり分けたお好み焼きを誰よりも早く口に入れた。正直な感想は熱い。けれど噛んだ瞬間にそれが旨いものであるということは、はつきり認識できた。柔らかな食感の中に時折混ざるキャベツの歯ごたえと広がる旨味が絶品だ。

「二人とも少し交換しないかな？」

七瀬が俺と間宮ちゃんに向かってトレードの提案をした。女の子らしい発想。男である俺は、ほっとかれていたら勝手に全てを完食していただろう。

「いいぞ。七瀬のはチーズの入ったやつだろ？」

自分のを差し出すのと引き換えに七瀬のお好み焼きを受け取った。すぐにチーズの香りが押し寄せる。口に含むと、香りを裏切らない予想通りの濃厚な味がした。

「ほらっ間宮ちゃんも」

七瀬の押しに間宮ちゃんは頷くと、小さな手でヘラを握り、海老

のたっぷり入ったお好み焼きを取り分けて俺たちに渡してくれた。生地のいたるところから海老がはみ出て、見た目は何か別の料理みたい。例えるなら寿司とカリフォルニアロールみたいな関係。どちらとも寿司と言われればそれまでんだけど、本家ではないような、店長の遊び心が入っているような、そんな曖昧な感じ。伝わりにくくてごめん。

結局全員が好き放題食べて満足したのが九時過ぎのこと。女の子もいるのにこんなことをしたらダメ男と言われてしまいそうだけど、食べた量の順位は、健、美沙、俺、七瀬、間宮ちゃんの順。期待を裏切らない健はぶっちぎりで優勝だ。

「さて、お皿洗うわよ」

美沙はお座敷から立ち上がると、全員を見渡して当たり前のように言った。

「は？」

「だから、洗うわよ」

「何を？」

「お皿」

「何で？」

「食べたから」

俺は、日本語を覚えてたての外国人のように単語を単発する美沙の

言いたいことを脳内フォローすると全てを理解した。店長が驚く俺たちを見て笑っているのも揺ぎ無き証拠。つまり美沙は俺たちが好きなだけ食べる代わりに皿洗いする約束を店長と結んでいたということだ。

「なら、俺たち金持ってきてるからちゃんと払うぞ」

「ダメよ。私が持っていないから。一人で皿洗いなんてやってられないじゃない」

——またおまえの事情か。

「でも古橋君、みんなでお皿洗いって楽しそうだよ？」

と七瀬。間宮ちゃんも大きくコクリ。

「僕も本当にタダって言うから、持ってるお金以上に食べちゃったよ」

動くのもつらそうな健が時折、『うぷっ』と言いながら美沙の提案に賛成した。

「じゃあそれで決まりね。わかったら早く始めるわよ」

結局、健の事情が決定打となり俺たちは厨房で皿洗いをする事になった。

でもこの時の俺たちはまだ知らなかったんだ。自分たちの食べた量に比例して皿洗いすることになるなんて。そして、健だけが居残りで一人洗い続けることになることを。

揺れるアホ毛

憂鬱な月曜の午後。俺は三時間目の英語の授業中ずっとアホ毛越しに黒板を見つめることになった。寝息を立てるたびに美沙のアホ毛が左右にゆらゆらと揺れ、それはまるで土手に咲く猫じゃらしのよう。鬱陶しいことこの上ない。そんな俺じゃらしはチャイムが鳴るまで続いた。

「おはよう憲司」

嫌いな授業は全て睡眠で回避するという典型的にアレな子である美沙は、真後ろに座る俺に振り返ると本日四回目のおはようを言った。

「もう聞き飽きた。娘がそんなんじゃない理沙さんも悲しむぞ」

理沙さんとは容姿端麗良妻賢母である美沙の母親のこと。その肩書きは中国に来てしまったのかと思うほど綺麗な漢字が並ぶ。とてもじゃないが同じ遺伝子が入っているとは思えない。大方、子供の頃から田中商店の怪しげな遺伝子組み換え食品でも食べ過ぎたのだろう。昔、『カツという駄菓子をおかずにご飯を三杯食べてみた』と大威張りで報告してきたことを思い出した。

「そうか。おまえはかわいそうなやつだったんだな」

「何を一人で納得しているのよ!」

遠い目をして窓から覗く木々を眺める俺に、鋭くキレた十代。

「俺のシャツを掴むより、まずはおまえのアホ毛をなんとかしろ。やらないなら俺が収獲してやるぞ」

俺がアホ毛を軽く摘んで言うと、美沙は俺の手を払い、恥ずかしそうに顔を俯けてしまった。

——気づいてなかったのか？

「見た目しか取り柄が無いんだから、もうちょつと気を使え」

「……褒めてるの？」

「そう聞こえるならそれでもかまわん」

結局、整えたはずの美沙のアホ毛は、四時間目が始まると同時に息を吹き返したかのごとくスタンダップ。ゆらりふわり、授業が終わるまで俺をおちよくり続けた。

隕石が降る

夜中の自室に突如、窓から響く不気味な音。犯人が誰かなんてことはもうわかりきっていることなんだ。もっと言うなら、俺じゃなくたってこの犯人を推測することは困難じゃない。どうせ理由は、お昼過ぎに流れている昭和のメロドラマの再放送を見ていて、やってみたいと思ったとかだろう。

状況によっては放置することも出来るが、しかし後一押しで窓がご臨終してしまいそうな勢いで何者（美沙）かは石をぶつけているのだ。それは俺に気づいて欲しいというよりも、むしろ破壊しようとしていると言えるだろう。しかも石の当たる間隔を観察すると、恐らく両手投げ。市街戦とは良い度胸。

鍵を外すと、精一杯の冷めた目をして窓を開いた。

「やっと気づいたの？ コンビニ行くわよ！」

と、やはり開けなければ良かったと思えるほどふざけた第一声。だから俺は、

「寝言は自分の家で、自分の部屋で、自分の布団でしてくれ。公共の道で寝るな。わかったな？ じゃあな」

そう言う窓をスライドさせて閉じようとするが、その瞬間に再び小石じゃない石の連射が始まる。人の心の鍵をバズーカ砲で破壊して突破するような無神経な女に人の都合なんておかまいなしだ。要は人間偏差値が異常に低いってこと。

窓を閉めれば割れてしまうし、かといって開けっ放しにしておく、俺の部屋は川辺の砂利のようになってしまう。

「とにかくその小石じゃない石を投石するのはやめろ」

増え続ける石を拾い集めて俺は言った。そして手元に溜まった石を美沙に投げ返す。近所迷惑なんて考えてられない。もはやこれは、こいつと俺の市街戦なんだ。負けたほうが謝罪しに行けばいい。悲しいけどこれって戦争なのよね。

けれどあえて外して投げてることはいつに見透かされているようにどこか悔しい。だってその証拠に微動だにしない仁王立ちだもん。勇ましすぎるよ。まだノーコンって罵倒されたほうが楽だ。

「はい、おしまい。さて、コンビニに行くわよ」

俺の絶対当たらない魔法の石が弾切れしたところで、再び宣告。

「そもそもうちの村にはコンビニなんて無いだろうが」

「だから隣町まで行こうと思ってるのよ」

「自転車じゃないと無理だって。美沙は昔っから乗れないだろ？」

「なら……二人乗りすればいいじゃない」

俺のこのどうにもならない気持ちはきつと、二人が社会的立場において対等にあることが問題なんだと思う。例えば、俺と美沙が奴隷と主人の立場だったら俺は美沙の命令を聞くことに疑問を感じる余地も無いから楽なはずなんだ。だが現実には、俺たちは村の学校の同級生。少なくとも俺が美沙のために働く義理は無い。

でもきつと……。

きっと三分後の俺は、美沙を乗せて自転車を走らせているんだ。
出ないため息を無理やり吐くと、

「しかたねえな。ちょっと待ってろ」

今日は眠れそうに無い。

騙し合い

只今、授業と授業の合間の使い道のわからない十分の休み時間中。俺の目の前で繰り広げられているのは三文払ってやるのも惜しくなるほどの三文芝居。役者は美沙と健だ。

「なるほど美沙ちゃん。つまり僕が百円を出資すれば十倍になって返ってくるってことだね？」

「そうよ。あんたはただ私に小金を預けるだけで得をするの」

「これで僕の老後も安心ってわけだね！」

俺だけのために開演されているマルチ商法の劇は、俺が話を聞いているのをチラチラと役者が確認しながら進行する。友達を紹介すればさらに儲かると言っている辺り、ネズミ講も兼ねたマルチらしい。そして二人いる役者のうちの一人は、きっと巨大な圧力に屈して犯罪の片棒を担がされているんだ。ほら、その証拠に、太った男子は手のひらに書きとめたカンペを見ながらセリフを発してる。

「じゃあ、僕は、とりあえず、百円を、間違えた、千円を、出資しよう、かな」

健がセリフを間違うたびに美沙の舌打ちが聞こえ、美沙が舌打ちするたびに健が恐怖でセリフを間違えるという、なんたる悪循環。けれど笑えるクソゲーと同じで、製作側が狙っていないところに笑いがあってなかなか面白い。

健は財布から千円を取り出すと、ヒラヒラとわざと俺に見せるようにしてから美沙に預けた。まるでその様子はこれからマジックでも披露するかの様。まあ、胡散臭さだけは二人とも一流のマジシャンだ。

「結果は数ヵ月後に出るからそれまで楽しみにしてなさい」

美沙のこのセリフと同時に劇は終了し、主演女優の挨拶もなく、そそくさとその場からいなくなってしまった。そして静まり返った周囲に残されたのは健と俺。互いに目を合わせていると、初めに言葉を発したのは健だった。

「ねっ、ねえ憲司君？」

健は『ダクダク』と、耳を澄ませばそんな音が聞こえてきてしまいそうなほどの大量の汗を額に浮かべて俺の名前を呼んだ。

「なんだ？」

「もしかしてー。そのー。騙されたのって……僕？」

「ご名答」

金銭感覚

放課後。俺は家に帰ると食卓に置いてあった書置きに気づき、近所の商店街に向かった。要はおつかい。

何度読み返してもイライラする書置きには、息子相手にテンションの上げ下げを示す矢印や女子中学生が使うようなテクニックがふんだんに盛り込まれており、『おかえりい→』や『帰りが遅くなったらごめんねえ←』などを筆頭に絵文字・顔文字のオンパレード。せめてラメ入りマーカーで書くのはやめて欲しい。目がチカチカする。

村唯一の商店街に到着すると、夕暮れを背景に買い物籠を腕に下げてノスタルジックな雰囲気をももし出している間宮ちゃんを遠巻きに発見。そして商店街から少し離れた田んぼにはシルバーカラーの円盤型飛行物体が突き刺さっているのが確認できる。

そんな様子に俺から言えるのは一言、情報量が多すぎる。けれど村人を含め、運転してきたであろう当の本人もそんな交通事故を気にする様子もなく魚屋の前に立ち、旬な魚を吟味しているようだ。

間宮ちゃんはお目当ての魚を見つけると、一匹三百円と書かれた魚を指差し、店の人に向かって何かを喋りながら二本指を提示した。

——値切り交渉！？

そう、間宮ちゃんは恐らく三百円の魚を二百円に負けてもらおうとしているのだ。しかし円盤型飛行物体が今噂のエコ仕様であったとしても明らかに値切っている額より交通費が上回っていると思うのだが、きっとそんな細かいことを気にしていたら彼女のクラスメ

イトは勤まらない。それどころか俺は隣の席なのだ。学園生活のパートナーと言っても過言じゃない。だから、気にしちゃだめだ。気にしちゃだめだ。気にしちゃだめだ。

間宮ちゃんの攻めは続くが、店の主人は要求に頷くことなく首を横に振る。けれど間宮ちゃんは折れることなく相手の目を一心に見つめ、瞬きもせずに二本指を出し続けるが、それでも主人は首を壊れた扇風機のように速い速度で横に振り続けた。

「どした？　なんかトラブル？」

少し離れた所から見ていた俺は、冷戦に終止符を打つべく間宮ちゃんに近寄ると声を掛けた。

「こんばんは憲司さん」

俺に振り向きもせず挨拶。気にする必要はない、間宮ちゃんはこういう人なんだ。

「お兄さんこの子の知り合い？」

と、壊れた扇風機もとい、店の主人。

「はい。一応知り合いですけど」

「よかった。お兄さんからも無理だと言ってやってくれよ。この子がこの魚を二円で売れって言うんだ」

——もはや泥棒だろそれ。

授業参観のお知らせ

今日の夕飯はビーフストロガノフ。ハッシュドビーフでもハヤシライスでもなくビーフストロガノフ。作ってくれた人がそう言うてはばからないのだから、その辺は大事にしてあげたいと思う。

「どう？ 母さんのビーフストロガノフおいしい？」

そう言うとき母さんは持っていたスプーンを口に少しくわえて俺の反応を待つ。

「ん、おいしいよ」

「だーめ。ちゃんと『母さんのビーフストロガノフ』がおいしいって言うって」

やけに『母さん』にこだわる母さん。まるで出所したばかりで二十年ぶりに息子に会うかのような貪欲な攻め。けれどいきなりそんなこと言われても俺にも心の整理があるからすぐには……。なんてね。

「母さんが作ったんだから、母さんのビーフストロガノフなのは当たり前前だろ？」

「うんうん。そうね、憲司の気持ちもわかるわ。だって母さんがこんなにかわいいと母さんなんて呼べないものね。じゃあ……名前で呼んでもいいわ。うふっ、パパには内緒よ。怒られちゃう」

白線の内側にお下がりください、妄想列車が通過いたします。脱線すればいいのに。

こうして通勤に片道四時間掛かる父さんの代わりに、毎晩母さんの話し相手になる俺。父さんはきつとこういうきやぴきやぴしてる感じにやられたんだと思う。息子の俺からすると多少鬱陶しいけれど、旦那からするといつまでも若々しい奥さんってのはいいものなのかもしれない。

「話が変わるんだけど、今度授業参観あるけど来る？ でも忙しかったら全然いいから……」

「いくいく！ ぜえつつつたいに行くわよ！」

アスリート並みのレスポンスの速さ。目の色が変わったのは正確には俺がまだ『授業参観』の『じゅ』の字を言おうとした瞬間のこど。サッカー日本代表は母さんを今すぐキーパーとして招集すべきだ。もし、サッカーボールに俺の好きな人の名前を書いたとでも言おうものなら、ブラジル選手の強烈なシュートだって止められる。なんてったって息子のゴシップが最高の餌なのだから。

「で、で、いついつ？ 授業参観はいつなの？ いつなのよおー？」

「そのテンションがすつごく不気味なんだけど……邪魔しない？」

「邪魔なんて、しっないっわよんっ」

——嘘だ。絶対なにか企んでる。

そう、去年だって何を勘違いしたのか問題が解けると言って得意

気に手を挙げていたし、いつもよりいつそう集中すべきであるはずの授業中に美沙とノートの切れ端を投げあって手紙交換していた。もちろん家に帰ってあれだけ反省させたから今年は大丈夫と思ってはいたけど、考えが甘かったかもしれない。けれど俺から言わなくても美沙の母さんである理沙さんから連絡がいくわけだから結局は時間の問題で、このままだと『上機嫌の美沙＋気合の入った母さん』学級崩壊』のテロまがいの方程式は免れない。しかも『上機嫌の美沙』と『気合の入った母さん』を分解すると、『俺』という人間に強い関連性があるではないか。一人は幼なじみで、もう一人は母親だ。俺に対する社会的制裁は覚悟すべきだろう。

「授業参観に來たいなら、一つ俺と約束して欲しいんだけど」

「なあに？」

「美沙に近寄らないで」

「うふふ。憲司ったらかわいいんだからもう。大丈夫よ。母さんは憲司から美沙ちゃんを奪ったりしないから。きっと美沙ちゃんも憲司のこと大好きよ」

——何を言ってるんだこのカマトト女は！？

いや、落ち着け。冷静に考えると実の母親をカマトト女というのもどうかと思う。父さんが聞いたら泣くぞ。

「母さんと美沙が一緒になると変な化学反応起こすから嫌なんだよ。毎年そうだろう？　だーかーらー、近寄らないでくれって言ってんの」

「うんうん。ラジャー。母さんびっちりばっちり完全に了解しまし

「たあ」

——ダメだ。早くこの人何とかしねえと。

日常に潜む罠

「寝ながら学校に行くという競技があれば私は間違いなく金メダルを取れるわ」

教室のドアを開けようとした瞬間に聞こえたそんな会話。朝から揚げ物を無理やり胃袋に押し込まれたような気持ちになる。どう考えても会話の味付けが油っぽく、そして濃すぎるのだ。体に悪いのは言うまでもない。

「でも問題が一つあるの。この競技は終始寝ていることが前提だから、ゴールした瞬間に達成感を味わえないことが不満ね」

この大量の毒を含んだ電波が流れたことを決め手に俺はドアに伸ばしかけた手を引っ込めてしまった。もし今ドアを開けてしまったら『今日からこの競技のトレーニングをするから付き合いなさい』や『部活を作るから憲司を副部長に任命するわ』なんていう背筋も凍るおぞましい展開が待ち構えているに決まってる。いや、待っていると言うよりも、襲ってくると言ったほうが正しい。

「どうしたの憲司君？ 教室に入らないの？」

隣にいる健は、俺がドアを開けるのに躊躇している様子を見て不審に思ったのか、せかす様に尋ねた。どうやら健には教室の会話が聞こえていないのか、この先待っているバッドエンドが予測できていないらしい。

「なあ健？ もし寝ながら学校に行く競技を練習する部活があった

ら入部したいか？」

「うーん、第一そんな馬鹿なことをする人いないと思うなあ」

——限りなく澄んだ正論。

健が自分の答えに確信を持つかのように一人頷くと、静かに教室のドアが開いた。

そしてそこに立っていたのは、

「誰が馬鹿ですって？」

美沙がまだ振り向かない健の後頭部を射抜くかのように凝視していた。

「びゃあああ——。美沙ちゃんごめんよお——！」

——ご愁傷様。

授業参観のお知らせ2（前書き）

第21部の授業参観のお知らせの続きです。
更新が遅れているので、ボツになったものですが投稿しました。

授業参観のお知らせ2

授業参観当日。どころか直前。母さんに授業参観のお知らせを渡してから今日までの空白の数日は報告するほどのことでもないから割合させてもらう。きつとこのことを母さんに言ったら『せっかくついてきた私のファンが減る』とでも言い出しそうだけど、残念ながらそんな奇怪な遺伝子を持つ人はいない。

けれどもし俺の母さんが好みだなんて言っちゃうような複雑な遺伝子を持つ君には申し訳なく思う。俺は人の趣向にまでケチをつける気はないよ。フアイト。

教室の後方をじっと見つめたまま『早くお母さん来ないかなあ』と呪文を唱えるように言ったのは七瀬。同時に半径二メートル以内の男子に体力回復の補助効果が発生。癒し系は健在だ。

しかしそれとは反対に『暇だわ。新しい部活でも作ろうかしら。まずは部員が必要ね』と言ったのは美沙。同時に半径四メートル以内の男子に恐怖を植えつけることに成功。美沙の隣の席に座る健なんてもはや失神しそう。

数十秒後、足音で気づいたのか香りで気づいたのかはわからないけど、母さんたちが狭い教室をステージ代わりにテトリスの如くみっちり埋まってゆくのに気が付いた。どうやらみんな教室に入るタイミングを伺って廊下で待っていたらしい。

そこで先陣を切ったのは美沙の母親である理沙さんと俺の母さん。何を勘違いしているのか、母さんは理沙さんの腕に手を組んでる。毎度ご迷惑おかけします。

教室の曇ったガラスから廊下を見ると、誰かは確認できないけど

保護者の残りの人数は二人。しかし教室という名のステージはブロックを二つ受け入れる余裕などなく、ゲームオーバーは目前だ。

そしてビリから二番目に入ってきたクラスメイトの母親はブロックに例えるなら凹。すると他にもこの状況をテトリスに例えていたヤツが両手で机を叩いて立ち上がり、『そんな使いづらいブロックじゃゲームオーバーになっちまう』と悲痛に叫んだ。そして叱られた。

しかしクラスみんながその最後の一人を知ったとき、全員から歓声が上がった。なんと最後に教室に入ってきたのは健の母親であり、シルエットがあまりにも凸に似ていたのだ。その綺麗なハマリ具合は思わず消えてしまわないか心配になるほど。

この結果に健は誇らしげに言う、

「僕は凹が落ちてきた瞬間、こうなるってわかっていたよ」と。

「さて、みなさん揃いましたね。授業を始めたいと思います」

いつもとは比べ物にならないほどのお洒落をした先生が、これまたいつもよりも先生っぽいことを言う。

開始した授業は数学。

「じゃあ……この問題を古橋君に答えてもらいましょう」

黒板に書かれた問題の難易度は中くらい。これなら……いける。俺は黒板の前に立つと、チョークを握って後方に振り返った。

——母さん見てるか？

けれど俺の母さんは既に授業に飽きた美沙と互いに会話してる。
俺が唯一聞きとれた会話は昨日のうちの夕飯がハンバーグだったと
いうことくらい。チーズを乗せるといびつな形が隠せて便利とかど
うでもいい。理沙さんも呆れてる。

——おい母よ。俺を見ろ。

未知なるもの

現在、数学の授業中。

俺は授業そっちのけで、隣の席に座る間宮ちゃんについて思いを巡らせていた。こんな言い方をするともまるで恋心でも抱いているかのように思われてしまうかもしれない。

違うんだ。

むしろある意味それ以上の感情を俺は間宮ちゃんに対して持っている。

——間宮ちゃん。

そいつは言わずと知れた俺たちのクラスメイト。

彼女はいつも円盤型飛行物体を乗り回していて、運転が下手なのかあらゆる建物を破壊してるけど、誰にも文句の一つも言われない謎の人。今だって、校庭に円盤型飛行物体が突き刺さってるんだぜ？でも誰も不思議に思わないんだ。どうしてそんな状況でマラソンができる。

「憲司さん、さっきから独り言がゴガツバエですよ」

不意に抗議じみた間宮ちゃんの声が耳に届く。

そう、こんな風に彼女は時折こうやって俺の心に忍び込んで突っ込みを入れてくる。世の中にはインチキ霊能力者が山ほどいる中、現実主義者の俺は認めたくないけど、間宮ちゃんはまぎれもなく本物の霊能力者か宇宙人か、ナニカだ。

そんな間宮ちゃんとはこんなことだってできちゃう。

いくよ？　じゃーんけーん、

ぱー。

「ぱー」

あーいこーで、
ちょき。

「ぐー」

間宮ちゃんの勝ちだ。

何が面白いかって？

どこも面白くないよ。

怖いんだよ。

「恐れることはありません。信じるものは時どき救われます」

極めつけは良く分からない宗教を信仰してるところ。給食の時間になるといつも宇宙にエネルギーを還元するために給食を残したりする。俺はそれら全て間宮ちゃんの嫌いなものと予想してるんだけど、本人は一切認めない。

「では、次の問題を間宮さんに答えてもらいましょう」

先生が間宮ちゃんを黒板に召喚した。召喚ってフレーズが洒落にならないから怖い。

そんなことを思った瞬間、黒板に向かっていた間宮ちゃんが突然振り返って言った。

「恐れることはありません。信じる者は時どき……」

「いいよ。時どき救われるのはもうわかったから早く行きなよ」

怪しげな宗教勧誘に嫌気がさした俺は思わず声に出して言った。
彼女はスッと黒板の前まで歩を進めると、軽くチョークを握って

音も立てずにサラサラ方程式を解いてゆく。どうせ彼女は出された問題を全問正解するんだ。
理由はわかるだろ？

あいうえお作文

二時間目の授業が残りわずかになった時に起きた出来事。

何の前触れもなく二年一組の教室前に設置されている非常ベルが
らけたたましい音が鳴り響いたのだ。甲高い音が和やかに家庭科を
していた教室に差し込む。そしてゴムボール人間がMAXで叫ぶ。

「かつ、火事だ！ 火事だよ。かじかじ、火事！ かつ、かつ、か
じじじ、家事！ 舵！」

健は非常ベルにも負けない大声で叫びながら慌てふためく。

エプロン制作なんてものをのん気にやっていたクラスメイトたち
にも一気に緊張が走った。

そんな様子を見て、リーダー気取りの美沙が言う。

「こんな時こそ避難訓練で培った『おかしも』を思いだしなさい！」

美沙の言う『おかしも』とは避難訓練の時に教え込まれた標語だ。
『お』さない、『か』けない、『し』やべらない、『も』どらない、
の頭文字を取ったもの。これに従って避難すれば生存率がグンと上
がる優れ物。まあ、知らない中学生はいないよな。

「じゃあ私から『おかしも』を始めるからみんなも続きなさい」

始めると言うニュアンスに不審な香りを感じるが、やはりこんな
ときこそリーダー格の美沙は頼りになる。みんなをまとめ上げると
いうセンスは他の誰よりも抜群に長けて^たいる。

「行くわよ？」

そう述べてから美沙は大きく息を吸って、

「『お』とうさん！ 『か』ぞくの！ 『し』りぬぐい！ 『も』ういやだ！」

驚愕。

俺は目の前で起きた光景に思わず眼を疑った。まさかこんな状況であおいうえお作文を始める人間がいるなんて。しかも得意げな顔して『どう？ 面白いでしょ？』っていう、笑いの押し売りが厚かしい。ノーセンキュー。一人で逃げ遅れてくれ。

「俺はおまえみたいな馬鹿に付き合ってられん、先に行くぞ」

「ダメよ！ 面白い解答をした人から避難していいことにするわ！」

それを聞いた瞬間に先生は一人で逃げた。薄情だし無責任だけど賢い判断。そんな馬鹿げた提案に賛成する人間なんて誰もいない。そんなことを言葉にしようとした時、間宮ちゃんがスツとちっちゃな右手を挙げた。普段はまともに喋りもしないくせにこんな時ばかりノリがいい。

「どうぞ、間宮ちゃん」

美沙が促す。

すると間宮ちゃんがこれまたちっちゃな唇を開く。

「『お』うおう、『か』ねもってんじゃねーか、『し』にたくなきや、『も』ろきゅーよこしな」

——お金関係無いだろ。

「合格！ 間宮ちゃんが一抜けね」

——なんでだよ！

俺の心の声を見無視すると、間宮ちゃんは最後ににやりと不敵な笑みを浮かべて教室から消えて行った。

「次はないの？ 早くしないと火がこっちまで回ってくるわよ？」

「ぼっ、僕がやるよ！」

何かを決心したかのように手を挙げたのは健。

美沙の許可も得ずに、勝手にあいいうえお作文をはじめた。

「『お』らうーたん、『か』れらの、『し』んせきは、『も』んきー」

「内容もつまらないし、リズムも悪いし、最低ね。オチもないし、ただ思いついたことを組み合わせただけの駄文。小学生の夏休みの宿題を眺めていた方がよっぽど有意義だわ。ああ、つまらない、つまらない。人間の質の低さが忠実に表れた作文ね」

「そっ、そんな。美沙ちゃんひどいよ」

「言い忘れたけど、失敗した人にはもうチャンスは与えないわ」

「ちょっとお！ じゃあ僕はどうすれば……」

健は突き付けられた事実上の死刑宣告にパニックに陥り、机の下に潜り込んだ。

頭隠さず、尻も隠さず、手足も丸見え。ゾウガメみたい。

――それは地震の時に有効な行為だろ

「あれっ？ 体が！ 体が抜けないよ！？ 助けて憲司くん！」

俺たちはそんな喋るゾウガメを放置して一目散に教室から脱出した。

後に分かったことだけど、実は非常ベルの作動は三年の神埼先輩のイタズラによるもので、火災は発生していなかったんだ。どうせだったらこんな馬鹿学校燃えちまえばいいのに。なんてね。

今日も平和。明日も平和。明後日も平和。一年中平和日和。

生前葬

毎度お騒がせします。例の如く二年一組の突発的なイベントシーンの開始です。

今教室で何が起きているのかということを簡潔に説明すると、それはつまり、

――葬式。

生のある限り誰でも迎えることになる重要な儀式だ。それを小汚い教室で執り行っているのだ。

とはいえ、俺は神妙な表情を見せるところか、机に乗っかって足を投げ出しながらその様子を野球観戦のおっさんのように眺めていた。涙も出なければ悲しみも襲って来ない。しかしそれは俺だけではないようで、現場では、出ない涙を無理やり流している奴や、喉に負担を掛けて無理やり嗚咽を漏らしている奴でわんさか溢れている。オエオエオエのハーモニー。無理にでも泣かないと故人に怒られるのだ。

俺はとにかくこの憂鬱なイベントシーンを未読スキップして早く帰りたいため、声を荒げる。

「美沙、いいかげんにしろよ」

俺は棺桶に見立てた段ボールに向かって話しかけた。返事は無いが中には美沙がいる。そう、美沙が死んだのだ。いやいや、こんな世界が滅亡しても生き残りそうなタフな女が死ぬはずもなく、今執り行われているのは、

——生前葬。

生きている間に自身の葬式をするという悪趣味かつ滑稽な催し物だ。

美沙の『私がいなくなったらみんなはどれくらい悲しむことができるか』の一言で始まった生前葬は、国民的アニメに出てくるガキ大将のリサイタルさながらの人数を集めていた。『こないとぶんなぐっかな！』だ。

クラスメイトたちが一人ずつ『温州みかん』と書かれた段ボールの前に足を運ぶと、言葉を述べる。

「あんなに優しくて美人で勉強できる美沙ちゃんがいなくなっても悲しいです」

すると、温州みかんが嬉しそうにもぞもぞ動いた。

——がつつり生きてるじゃねーか。

次の生徒は小説家志望の七瀬だ。今日のためにメガネのフレームを黒にモデルチェンジしていた。

七瀬はをお焼香をあげるふりをしてから美沙の遺影に手を合わせる。遺影がスナップ写真であるため、美沙の隣に俺が写っているのだが、その点に関しても声を大にして抗議したい。

「美沙ちゃん、私にとって美沙ちゃんは立派なヒロインだよ。学習会で最後までシンデレラを演じてくれたことはずっとずっと大切な思い出。いつかまた一緒に劇を作ろうね」

ごそごそごそごそごそ。

温州みかんが今までとは比較にならないくらい暴れだした。とても、すごく、めっちゃ嬉しいらしい。

藤堂美沙って黒板に書いてある名前を、剛田美沙に書き換えてやろうかな。

最後のお別れを済ませた七瀬がハンカチ片手に俺に近寄って言う。

「次は古橋君の番だよ……」

そして後半を小声で絞って言った。

「早く済ませちゃった方がいいと思う」

「だな。ちよつと適当な挨拶してこんな茶番すぐに終わらせるわ」

俺は美沙の遺影に近づくと、二人でピースしながら写っている入学式の光景を黒板から引っ剥がす。

そして段ボールに包まれた美沙に正直な気持ちを伝えた。

「今日はなんていうかその、とても喜ばしいことで……」

温州みかんはびくともせず、黙ったままだ。きっと熱の籠った段ボール内で血管がはち切れそうになっていることだろう。

こんな茶番に付き合わせてくれたお礼と言わんばかりに、俺は言葉が続ける。

「ついに待ちわびた日がやってきたと言っても言うのでしょうか。明日から平穏な毎日が迎えられるそうです。おわり」

直後、段ボールをブチ破る音とともに、故人が生前よりも凄まじ

い迫力で蘇った。

入学式

春、それは別れと出会いの季節。

春、それは触れてはいけない事情の多い季節。

そんな春真っ只中、俺たち二年三組は毎年訪れる奇病『ハルノヤマ』に苦しんでいた。

「今日は入学式だな」

俺は、遙か遠い昔の思い出を懐かしむかのように呟く。けれど呟きは決して誇張した表現ではなく、まぎれもない事実。誰もが口にするこのできない現実だ。

前の席に座る美沙も同じ気持ちなのだろう、何かを言いたそうにこちらを振り返る。

「美沙、何も言うな」

「あんたに釘を刺されなくっても、私だって言って良いこととまずいことくらいの分別つくわよ」

珍しく、というより当然か、全員と同じくハルノヤマに侵されている美沙も触れてはいけない事実に苦しんでいる様子。自分も被害者の一人であることを伝えると再び机に突っ伏して現実から離脱を試みた。

校庭では教室の空気とは対照的に、これから始まる学校生活にそれぞれ思いを馳せた新入生が賑やかに新しい出会いを歓迎している。とはいえここは村。新入生の数もたかが知れているのだが、そ

れでもこれから俺たちの後輩になる大切な仲間であることに変わりはない。

なんて本気でそう思えたら幸せなのだが……どんな状況下においても空気を読めない奴は必ず一人はいて、

「ねえ憲司君、僕たちって去年と同じ二年三組の教室にいるけど進級しないの？ あっ！ そういえば去年一年生として入学してきた生徒はどこに行ったの？ ねえねえ？ うわぁなんか僕怖い……」

すると健の主張がすべて語られる間もなく突然大きな音を立てて教室の扉が開いた。

立っているのは黒服を着た二人組の男。この場にはまったく似つかない彼らはカツカツと革靴を鳴らしながら一直線に健に近寄った。

「えっ！？ なに！？ あなたたちは誰！？ うう、うわぁああ！
僕をどこに連れてく気い！？」

黒服Aは抵抗する健にそつと囁く。

「あなたはこの学校のタブーに触れたので卒業です」

体育館で入学式が行われている最中、うちのクラスから卒業生が出た。

自主レーベルで人気上昇

健が再び教室に返還されていていつもの平穏が戻った教室内。拉致された本人は独り言で『何も見ていない、何も知らない、誰にも言わない』って繰り返しながら震えてる。おかえり。けれどまだロッカーの中で黒服Bが健を見張ってるんだけど……怯えてしまうから言わないでおこう。

「ねえ憲司」

美沙の声だ。こうもつと柔らかくて穏やかな声なら舞い降りるって表現を使ってやってもいいんだが、何にせよ中身が国民的アニメのガキ大将だ。可能なら放つ言葉全ての文字に濁音を付したい。あるいは今度から『がぎぐげご、ざじずぜぞ、だぢづでど、ばびぶべぼ』のみで会話してくれ。例えば、ぼばじぐげずじ（おはようけんじ）みたいな。ははっ、何言ってるか全然わかんねえ。

「ねえってば！ 聞してる？」

「あ、わり。妄想にふけてた」

俺は二文字で謝罪を済ませると、話の続きを促した。

「私たちにとって決定的に足りないものって何かわかる？」

——また始まった。

そんな声が一話から読んでくれている希少な読者から聞こえてき

そうだ。

「私たちに足りないもの……それはキャラクターソングよ！」

なるほど。今回はそういう展開ですか。非常に残念です。

「悲しいお知らせをするが、キャラクターソングは人気あってこそだ。無名の俺たちのキャラソンなんて誰が喜ぶと思う？」

「私の分はもう昨日徹夜で作ったの」

美沙は、まるで俺のセリフを削除したかのように強引な無視をきめると、そつとルーズリーフを差し出した。

☆☆☆☆☆☆☆☆

『実効支配』

作詞・作曲 藤堂美沙

世界はいったい誰のもの？

朝っぱらからうるさいカラス 撃ち落として轟音

消えない呪怨 神様に告げ口 稲妻ビリビリGO ON!

それでも続くよ はかない青春 叫べばドンドン上がる高温

天国そこは私の植民地 溢れる魂 私に元気を

正義をまとう正規軍 かかってくるヤツ手を挙げて

ミカエル無条件にぶっ飛ばす 見返りはいらない

世界はぜったい私のもの！

着信拒否した最悪なキミ 撃ち落として絶叫

治まらない狂喜 私は乱舞 ガミガミ説教いつとく！？

天国にいる住所不定のキミ 逃がさない 私は誰よりも屈強

天国そこは私の植民地 溢れる魂 私に元気を

正義をまとう正規軍 かかってくるヤツ手を挙げて

ミカエル無条件にぶっ飛ばす 見返りはいらぬ

交わることのない平行線 終わりの見えない合戦 飛び散るBlo
odは比較的新鮮

異世界さえもが私のもの！

二択で話すシャイな勇者 ばふばふでKnock Out

使い魔召喚魔法使い 唱えてる途中にごめんね バツサリ！

セーブ忘れたDon't Mind 誰にも負けなきゃ必要ないで
しょ？

It's mine

It's mine

It's mine……（×200回）

☆☆☆☆☆☆☆☆

言葉を失うってこういう状況を言うのか。いや、しかし何か言葉を
を発しなければ隣にいる自称作詞家は俺が感動しているとでも思い
込む。それは避けたい。

だから率直な感想を、

「いったいなんなんだ……この、骨の髄まで二次元に侵されているような恥ずかしすぎる曲は」

「何であんたにそんなこと言われなきゃいけないのよ!」

「骨どころか前世の魂まで侵されてないところまで書けないぞ普通」

「誰が前世は春画オタクですって!? 人がせっかくがんばって作ったのに」

俺と美沙が恐ろしくくだらない言い争いをしていると、そんな様子を見ていられなくなったのか、さっきまで震えていた健が仲裁に入った。

「まあまあ二人とも落ち着いて。二次元に侵されてるもなにも僕たちはそもそも架空のそんざ……」

健が黒服Bに連れて行かれた。卒業ですね。わかります。再教育をお願いしますよ。

「と、に、か、く! CDを作って私たちの人気を高めるのよ! わかった?」

「わかったもなにも好きにしてくれて構わん」

「何を他人事で済ませようとしてるの? カップリング曲の作詞は憲司の担当よ」

——おい、聞いてねえぞ。

女子の駆け引き2

放課後の図書室。

俺は知り合いの中で唯一の常識人である七瀬と二人きりで頭を悩ませていた。机にぎくばらんに広げられたルーズリーフと、添削のように赤ペンで何度も修正を繰り返しているそれが俺たちの苦悩の深さを物語る。それもこれも全部あいつ、美沙のせいだ。

「ごめんな七瀬。くだらねえことに巻き込まれて」

「全然大丈夫だよ。すっごく楽しいし」

屈託のない、相手に疑う余地さえ与えない七瀬の笑み。非常に助かる。にしても七瀬とこうして二人きりで向かい合って会話するのもいつぶりだったか。俺たちは親しいようで、距離感のある、世間ではこれをいい関係と言うのかもしれないけど、俺はもう少し縮める余地があるんじゃないかって思う。いやマジで。

俺の期待を背負った七瀬が口を開く。

「うーん……むう……」

しかし出たのは言葉ではなく唸り声だった。いくら楽しいと言ってくれたとはいえ当然だよな。いきなり歌詞作ってくれたなんてさ。七瀬は小説家志望であって作詞家志望じゃない。でも頼み申せる人物の中では最も適任のはず。俺が期待するのも無理はないだろ？

「なあなあ七瀬、もう簡単に『私は美沙ガキ大将』天下無敵の女だ

ぜ』でいいんじゃない？ みんなにウケるだろ」

「古橋君……死んじゃうよ」

「じゃあタイトルは『C a g a y a k e ! T a i s y o 』で歌詞は『遅刻はしても早退はY e a h Y e a h Y e a h 』とか『男子禁制の授業 恋綴った20行』とかは？」

「絶対だめ！ ほらっ、あそこで黒服の人が古橋君のことジッと見てるよ！」

——まだそのネタ引っ張るのかよ。

とはいえ俺も健のように目をつけられて再教育させられるのは勘弁。ここは安易な引用（盗作）を避けて自分たちで考えるべきだ。でなければ俺だけでなく七瀬まで目をつけられて再教育ゆきに……ん？ 悪くない響き。

「でもね、私思うんだけど……」

改まった七瀬の前置きに、ルーズリーフに落としていた視線を上げる。

「ん？」

「どうして美沙ちゃんが古橋君に作詞を頼んだのかももう少し考えてあげてもいいと思うな」

さらに七瀬は『手伝っ』といてこんなこと言うのも変だけど』と呟き『どうして私が手伝ってるのかわかったら天才』と続けた。けれ

ど七瀬の普段書いている小説の伏線さえ見逃してしまう俺には到底難しすぎる問題。全く理解できない。

「どうやら俺は七瀬のいう天才にはほど遠いようだ」

「そっか。わかんないか。そうだね。うん。ごめん、突然変なことを言っちゃって」

続きをやらなきゃ、と一向に進まない作業の継続をせかす七瀬が不思議とせつなくて、一瞬でもよそよそしくなった身振りに普段とは違う不似合いな影を見た。

奇妙な家路

すっかり帰るのが遅くなってしまった帰り道。気分は極度のセンチメンタル。

七瀬を先に帰した後も一人図書室で粘ってみたが、これといった進展は無し。それどころか七瀬の言った『美沙の気持ち』にばかり気を取られて仕方ない。十五年近い付き合いがあるのに今まで考えたこともなかった。身振り手振り、口から出る言葉があいつのすべてだと、そう本気で思っていた。

「そんな人間いるわけないよな」

どんなに馬鹿でも傲慢でも変態でも、心に秘める悩みや不安の一つや二つある。その優しい君がそうであるように、俺たちだって生きてるし悩んでる。互いに世界は大きく違うけど、思春期の悩みは全世界共通だよな？

にしても辺りは暗い。月明かりが日中とは違う村を演出してる。いくら慣れてるとはいえ、一人はちょっと心細いぞ。いでよ友達。

「憲司さん、こんばんは」

なんだ、いつものパーカーを着てる間宮ちゃんか。なんて思ったら心を読まれてしまうので注意しよう。心を読めるびっくり人間、それが間宮ちゃんなんだ。

「本当に憲司さんは失礼な人です」

「ごめんな。悪気はないんだ」

いつから傍にいたのかわからない間宮ちゃんに正直な気持ちを伝えた。厳密にはいつから友達なのかも、いつ出会ったのかも俺は知らない。記憶にないんだ。わかることといえば、数キロ先に煌々と輝く光が宙に伸びているが、その場所の地面に突き刺さってる円盤型飛行物体が間宮ちゃんの住居ということくらい。あと隠れ巨乳。

「巨乳……………」

「本当にごめん。何度も言うけど悪気はないんだ」

「あまり違う世界の人間に語りかけるのは感心しません」

間宮ちゃんは小柄な体の背筋を目いっぱい伸ばして俺を見つめる。視線に一切のブレはないが言葉の趣旨がいまいち理解できない。

「最近、設定や内部事情をネタにしすぎだと思います。終末フラグ立ってます」

「確かに。あまり度が過ぎると黒服に……………」

「でも、もし憲司さんが狙われたら一回だけ助けてあげます」

「ん、期待してる」

身長に大きな差があるのでこぼこのコンビの帰り道。こんな標識どこかで見たことある。でもあれって手をつないでたよな。それどころか、実は長身の男は誘拐犯って都市伝説もあるし。ああ、ちょっと怖くなってきた。

「やっぱ間宮ちゃんと一緒に帰る夜道ほど危険な香りはしねえ」

「せめて心で思うだけにしてください」

「どうせ読まれちゃうんだから正直にさ」

「私は今、憲司さんを喰らおうと心の中で企んでいます」

「三キロ離れて歩いてくれる？」

少々笑いのスパイスの足りない会話が続くけど、俺たちの日常に一番大切なものってこうしてどうでもいい会話を延々と語れる仲間なんじゃないかって思う。後は勝手に春風の揺らす木々がクスクス笑ってくれる。じゅうぶん合格点だろ。

俺は導き出した結論を満足げに笑うと、間宮ちゃんは急に立ち止まって、

「そんなに素敵なおセリフが言えるなら……」

「え？」

「歌詞も作れます」

何故知ってるの、よりも先に入り込んだ気持ちがある。

「もしかして……そのために来てくれたの？」

何にも返ってこない。真実もわからない。でも大切なことはわかっている。

そう、俺たちの世界はこんなにも優しさに溢れてる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6478h/>

プロット！

2011年5月8日19時38分発行